2206
220. 6-046ウ
1200500730606

始

220.6
0.46

大川周明著

米英東亞侵略史

東京
第一書房

919
151

序

昭和十六年十二月八日は、世界史に於て永遠に記憶せらるべき吉日である。米英兩國に對する宣戰の詔勅は此日を以て渙發せられ、日本は勇躍してアングロ・サクソン世界幕府打倒のために起つた。而して最初の一日に於て、既に殆んどアメリカ太平洋艦隊を擊滅し、同時にフィリピンを襲ひ、香港を攻め、マレー半島を討ち、雄渾無限の規模に於て皇軍の威武を發揚した。

この小冊子は、對米英戰開始の第七日、卽ち昭和十六年十二月十四日より同二十五日に至るまで、四方の戰線より勝報刻々に到り、國民みな皇天の垂惠に恐懼感激しつつありし間に行へるラジオ放送の速記に、極めて僅少の補訂を加へたるものである。それは『米英東亞侵略史』と題するも、與へられたる時間は短く、志

すところは主として米英兩國の決して日本及び東亞と並び存すべからざる理由を闡明するに在りしが故に、史實の敍述は唯だ此の目的に役立つ範圍に限らざるを得なかつた。若し此の小冊子が、聊かにても大東亞戰の深甚なる世界史的意義、並びに日本の莊嚴なる世界史的使命を彷彿せしめ、之によつて國民が既に抱ける聖戰完遂の覺悟を一層凜烈にし、獻己奉公の熱腸を一層溫め得るならば、予の欣幸は筆紙に盡し難いであらう。

昭和十七年一月

大川周明

目次

米國東亞侵略史

第一日……七
第二日……二二
第三日……三二
第四日……四四
第五日……五五
第六日……六九

英國東亞侵略史

第一日……八五
第二日……九七
第三日……一一〇
第四日……一二三
第五日……一三六
第六日……一四九

米國東亞侵略史

第一日

私は大正十四年、即ち今から十六年以前に『亞細亞・歐羅巴・日本』と題する著書を公けにして居ります。此の書物は百頁にも滿たぬ小冊子でありますが、容量に似合はぬ數々の大なる目的を以て書かれたものであります。目的の第一は、戰爭の世界史的意義を闡明して、當時日本に跋扈して居た平和論者の反省を求めるためでありました。目的の第二は、言葉の眞箇の意味に於ける世界史とは、東西兩洋の對立・抗爭・統一の歴史に外ならぬことを示すためでありました。その第三は、世界史を經緯し來れる東洋並に西洋の文化的特徴を彷彿させるためでありました。その第四は、かくして全亞細亞主義に理論的根據を與へるためであり

ました。而して目的の第五は、新しき世界の實現のために東西戰の遂に避け難き運命なることを明かにして、之に對する日本の莊嚴なる使命を省みるためでありました。私は此の書の最後を下の如く結んで居ります——

『いま東洋と西洋とは、それぞれの路を往き盡した。然り、相離れては兩ながら存續し難き點まで進み盡した。世界史は兩者が相結ばねばならぬことを明示して居る。さり乍ら此の結合は、恐らく平和の間に行はれることはあるまい。天國は常に劍影裡に在る。東西兩强國の生命を賭しての戰が、恐らく從來も然りし如く、新世界出現のために避け難き運命である。この論理は、果然米國の日本に對する挑戰として現れた。亞細亞に於ける唯一の强國は日本であり、歐羅巴を代表する最强國は米國である。この兩國は故意か偶然か、一は太陽を以て、他は衆星を以て、それぞれ其の國の象徴として居るが故に、其の對立は宛も白晝と暗夜との對立を意味するが如く見える。この兩國は、ギリシアとペルシア、ローマとカルタゴが戰はねばならなかつた如く、相戰はねばならぬ運命に在る。日本よ！

一年の後か、十年の後か、又は三十年の後か、そは唯だ天のみ知る。いつ何時、天は汝を喚んで戰を命ずるかも知れぬ。寸時も油斷なく用意せよ。建國三千年、日本は唯だ外國より一切の文明を攝取したるのみにて、未だ曾て世界史に積極的に貢獻する所なかつた。此の長き準備は、實に今日のためではなかつたか。來るべき日米戰爭に於ける日本の勝利によつて、暗黑の夜は去り、天つ日輝く世界が明け初めねばならぬ。』

私の此の立言は、十六年後の今日、まさしく事實となつて現はれたのであります。私は日米戰爭の眞箇の意味に就て、十六年以前と毛頭變らぬ考へを有つて居ります。」此の戰爭は固より政府の宣言する如く、直接には支那事變完遂のために戰はれるものに相違ありませぬ。而も支那事變の完遂は東亞新秩序實現のため、卽ち亞細亞復興のためであります。亞細亞復興は、世界新秩序實現のため、卽ち人類の一層高き生活の實現のためであります。世界史は、此の日米戰爭なくしては、而して日米戰爭に於ける日本の勝利なくしては、決して新しき段階を上り得

ないのであります。

然らば日本とアメリカ合衆國とは、如何にして相戰ふに至つたか。太陽と星とは同時に輝くことが出來ないのでありますが、如何にして星は沈み太陽は昇る運命になつて來たか。其の經緯を探ることが取りも直さず私の講演の目的であります。而して此の經緯を明かにすることは、同時に我等の敵の本質を、其の善惡兩面に就て併せ知ることに役立つのであります。」

「そもそも歐米列强の壓力が、頓に我國に加はつて來たのは、凡そ百五十年以前からのことであります。丁度此頃から、世界は白人の世界であるといふ自負心が昂まり、歐米以外の世界の事物は、要するに白人の利益のために造られて居るといふ思想を抱き、謂はゆる文明の利器を提げて、歐米は東洋に殺到し初めたのであります。然るに當時の日本は、多年に亙る鎖國政策のために、一般國民は日本の外に國あるを知らず、僅に支那朝鮮の名前を知つて居るだけで、印度の如きさへも之を天竺と呼んで、恰も天空の上に在るかのやうに考へて居たほど、海外の

事情に無關心であつたのであります。從つて文化年中にロシア人が北海道に來て亂暴を働かうとしたことは、日本に取りてまさしく靑天の霹靂であり、德川幕府は甚だしく狼狽したのであります。幕府は兎にも角にも有らん限りの力を盡して防備の方法を講じましたが、其の後は暫く影を見せなかつたので、文化・天保年中になりますと、却つて其の反動が起こり、海防のために力を注いだ松平樂翁公などを、臆病者と笑ふやうな始末でありました。騷ぐ時には血眼になつて騷ぐが、止めれば丸で忘れ果てて、外國船などは來ないもののやうに思ふ、これは今も昔も變らぬ日本人の性分であります。左樣な次第で其の後の數十年間といふものは、日本は或時は過度に外國の侵略を恐れ、或時は全く國難を忘れ去り乍ら、其日其日を過ごして來たのであります。

然るに嘉永初年の頃から、長崎のオランダ人が荐りに德川幕府に向つて、イギリス人・アメリカ人・ロシア人などが、日本に開港を迫つて來るから要愼しなさいと注進して來たのであります。此の注進によつて幕府當路の人々や、一部のオ

ランダ學者には、形勢が次第に切迫して來たことが知られて居りましたが、其の頃の政治と申せば、總じて何事も人民には知らせず、唯だ由らしめるといふ方針であり、また假令知らしめようと思つたところで、通信機關の不備な時代でありましたから、國民は無論のこと、役人の大部分さへ世界の形勢に就て無知識であつたのであります。尤も幕府は、『若し外國船が近海に現れた場合は『一念なく打拂へ』といふ命令を下しては居ました。併し幾ら『打拂へ』と言はれても、遠方に彈の屆く大砲もなく、鎖國以來巨船建造を禁ぜられて、一隻の千石積の船さへもない狀態であつたのであります。

日本の國内が斯樣な狀態に在りました時、豫てからオランダ人が注進して居た通り、日本に向つて開國を要求する外國軍艦が、堂々と名乘を擧げて江戸に間近き浦賀灣に乘込み、通商開港の條約締結を求めて來たのであります。それは言ふまでもなくペルリに率ゐられたアメリカ艦隊で、時は嘉永六年陰曆六月三日、暑い盛りの眞夏のことで、今から算へて九十八年以前、西曆一八五三年に當ります。

先程申上げた通り、此時より五十年以前から、外國船が屢〻日本近海に出没したけれど、其の立寄つたのは皆な江戸から申せば邊鄙の土地であります。從つて若干先覺者は夙に鬱勃たる憂國の心を抱いて居りましたけれど、國民一般は飄する馬牛であつたのであります。然るに此の度のアメリカ艦隊に至つては其の碇を泊せるところは日本國の玄關であり、其の求むるところは條約の締結でありますから、ロシアの軍艦が蝦夷の片隅に立寄つたのとは、其の人心に與へた影響は到底同日の談でなかつたのであります。浦賀奉行は、ペルリ來朝の趣旨が、アメリカの國書を奉呈し、通商和親を求めるに在るといふことを聽き、日本の國法を說明して、浦賀では國書を受取り兼ねるから、直ちに長崎に回航するやうに申しましたが、ペルリは頑として耳を藉さず、武力に訴へても目的を遂げねば止まぬ意氣込を示しました。其の上アメリカの水兵は、勝手に浦賀灣内を測量し初めたので、日本の法律は左樣なことを斷じて許さぬと抗議しましたが、ペルリは自分はアメリカの國法に從ふだけで、日本の國法などは一向に存じ申さぬと空嘯く始

末であつたのであります。

浦賀奉行の急報に接した江戸幕府の周章狼狽は、まことに目も當てられぬ次第でありました。飽迄も國法を守らうとすれば、忽ち戰爭の火蓋が切られて、江戸灣は封鎖される。さすれば鐵道も荷馬車もない其の頃の日本で江戸に物資を運ぶたつた一つの路であつた海上交通が斷たれてしまふ。江戸十萬の市民は日ならずして飢に迫る。さすれば既に動搖しかけて居た德川幕府の礎は愈〻危險になつて來る。假に幕府は何うなつても宜いとしても、何等防戰の準備なくしてアメリカと戰端を開くことは、日本の興廢に關する一大事なることを痛感したので、幕府は遂に久里濱に假館を建て、六月九日此處でペルリからアメリカの國書を受取り、返事は明年といふことにして、一旦浦賀を引上げさせたのであります。恐らく幕府の役人のうちには、アメリカと申せば波濤萬里の彼方である、往復には先づ二三年もかかるであらう、其の內に何とか妙策もあるだらうと考へた者もあつたでありませうが、ペルリは決して浦賀を去つて本國に歸つたのではなく支那の

に行つただけでありましたから、約束通り翌嘉永七年正月匆々、またもや浦賀に來り、而も此度は進んで神奈川灣に投錨し、幕府に向つて嚴重に確答を求めたので、止むなく幕府は横濱でペルリと談判を行ひ、遂に日本は長崎の外に下田・函館の二港を開く約束をしたのであります。

「僅に百年以前のことでありますが、當時の日本と今日の日本とを比べて見ますと、實に感慨無量であります。嘉永六年六月九日、愈〻ペルリが久里濱に上陸するといふので、アメリカ軍艦は砲門を開いて祝砲を放ちました。その殷々轟々たる響に驚いて、久里濱の漁民はすは戰爭だと仰天し、夜具包や佛壇などを背負ひ出して、山手の方に逃げまどつて居ります。また久里濱の假館では、ペルリ一行に腰掛けさせる椅子が無いのに困り、いろいろ智慧を絞つた揚句に考へついたのが、葬式の時に坊さんが使ふ曲錄であります。それが宜からうといふので、村役人・町役人に命じて寺々から曲錄を借り集めて見たものの、孰れも古色蒼然たるものばかりで、漆が剝げて居たり脚が折れたりして居ます。そこで大急ぎで朱塗

の剝げたのには紅殼を塗り、黑塗の剝げたのには墨を塗り、毀れたところは釘で打ちつけなどして漸く十脚だけ調へましたが、其の中で一番綺麗なのが野比村の最寶寺の朱塗の曲錄でありましたので、浦賀奉行が之に腰掛けることにしました。それよりも情なかつたのはペルリ艦隊が浦賀碇泊中の日本側の警備であります。幕府は四人の大名に此の警備を命じたのでありますが、其の方法は各大名が漁師から借り集めた漁船を以て、アメリカ軍艦を取圍み、謂はゆる八陣の備を取つて居るのであります。八陣の備と申すのは、三方から軍艦を取卷き、陣鐘・陣太鼓を鳴らし、法螺貝を高らかに吹立て、丁度鷄が羽を緊めるやうに、軍艦を羽がひじめにするのであります。其等の船には皆々澤山の旗・差物を立てて居るのでありますが、風が強く吹き初めると旗や幟がはためいて、船の動搖が激しくなるので、急ぎ之を旗竿に卷付け、船舷に横仆しにして縛り付けねばなりませぬ。其の上艦長は各藩の家老が之を勸めましたが、波が荒くなると肝心の艦長が忽ち船に醉ひ、呻りながら號令をかけるので、何を言ふのやら聽き取れぬ始末であります。

而してアメリカ人は軍艦の上から此の有樣を望遠鏡で眺めて居たのであります。此の警備はペルリからの抗議で解くことにしましたが實際は何の役にも立たなかつたのであります。此の時の警備の實狀を目擊した一人が斯樣に申して居ります——『彼の際に假令一片の風なく、十分に八陣の備を完うしたるにもせよ、いざ戰爭といふ場合に於ては、先方に於て仰々しく砲門を開き發砲するに及ばず、たゞ軍艦を以て、取卷きつつある百石積の運送船又は漁船の間を縱橫に操縱し暴れ廻るに於ては、恰も玩弄物の天神樣を摺鉢の中に入れ之を摺るが如く、一瞬にして粉碎微塵となるや必せり。然るにペルリは十分に此の狀態を知りつつ、心を和らげ溫心以て應接を遂げしは、實に寬仁大度の器量あるものと云ふ可し。』

さてアメリカが如何なる徑路を經て、日本に艦隊を派遣するに至つたかを述べる前に、先づペルリの人と爲りに就て申上げて置かねばなりませぬ。ペルリは一八五八年に使命を果たして歸國してから、直ちに詳細なる報告を政府に提出して居ります。此の報告は後に印刷に附せられ『一八五二・一八五三・一八五四年に

行はれたる支那海及び日本へのアメリカ艦隊遠征顚末』といふ長い表題の本となつて居りますが、實に四六倍版六百頁の大冊で、遠征中に是だけのものを書き上げるだけでも並々の仕事でありませぬ。而して報告中に現れたる彼の知識、彼の識見、注意の周到などによつて判斷すれば、疑ひもなく彼は當時アメリカ第一等の人物であります。仔細に此の報告を讀みますれば、我々は當時のアメリカの是非善惡を最も良く摑み得るやうに思はれます。

ペルリは一八五二年十一月二十四日ノーフォークを出發し、大西洋を横斷して十二月十一日、卽ち十八日目にマデイラ島に達し、玆で越年して一八五三年一月十日セント・ヘレナ島に寄港、一月二十四日ケープ・タウンに到着し、二月三日に此處を出帆して十八日に印度洋上のモーリシヤス島に着いて十日間滯在、次で三月十日にセーロン島、三月二十五日にシンガポール、四月七日に香港、五月八日に上海、五月二十六日那覇に着き、それから浦賀に參つたので、出帆してから約八箇月を費して居ります。これが當時アメリカから東洋に參る普通の順路であ

つたのであります。

ペルリは此の航海の途上に於て、歐羅巴諸國の數々の植民地に寄港したのでありますが、丹念に其の植民政策を研究し、其の非人道的なる點を指摘して、手酷き攻擊を加へて居ります。わけても著しく目につくことは、イギリスに對する激しき反感であります。セント・ヘレナに寄港中には、ナポレオンが幽囚されて居た見すぼらしき家を訪ね、假令敵とは言へ、古今の英雄にかくの如き待遇をするとは何事ぞと義憤を洩らして居ります。當時イギリスは、ナポレオンが五年間も起臥して居た家を、家賃を取つて一人の百姓に貸し、其の百姓はナポレオンの使用して居た部屋の一つを厩にして居たのであります。またイギリス植民地統治の殘酷に對しても忌憚なく彈劾を加へて居ります。是を今日の英米關係に對比して見ますると、誠に今昔の感に堪へないのでありますが、當時はアメリカがフランスの助力によつて獨立してから六七十年、イギリスと戰つてから三四十年經つたばかりで、今日とは事變り、アメリカは大なる敵意と反感とをイギリスに對して

抱いて居たのであります。但し彼は外國殊にイギリスの侵略主義を非難すると同時に、正直に自國の非をも認め、我々もメキシコ其の他に對して道德に背くやうなことをやつたが、之は國家の必要上止むを得ぬことであつたと申して居ります。彼は其のメキシコ戰爭に於ても、艦隊司令官として戰つたのであります。

ペルリは日本に參る前に、實に丹念に日本及び支那の事情を研究して居ります。從つて日本に對しても相當に正しき認識を有つて居りました。彼は日本人が高尙なる國民であること、之に對するには飽迄も禮儀を守り、對等の國民として交渉せねばならぬことを知つて居たのであります。卽ち日本に對しては、オランダの如き卑屈な態度を取つてはならぬし、またイギリスやロシアの如き亂暴な態度を取つてもならぬ。何處までも禮儀を盡して交渉し、止むを得ぬ場合にのみ武力を行使するといふ覺悟で參つたのであります。但し日本を相手に戰爭を開く意圖はなく從つて果して開港の目的を遂げ得るや否やを疑問として居ります。此の事は一八五二年十二月十四日附でマデイラ島から海軍長官に宛てた手紙の中に明記し

て居ります。但し其の場合は、日本の南方に横たはる島、卽ち小笠原島か琉球を占領すべしと建策して居ります。

斯樣な次第でペルリは中々立派な人物であり、かかる人物が艦隊司令官として日本に參つたことは、日米兩國のために幸福であつたと申さねばなりませぬ。其の上アメリカ合衆國も當時は決して今日の如き墮落した國家ではなかつたのであります。アメリカ建國の理想は尙ほ未だ地を拂はず、ワシントンの精神が國民の指導階級を支配して居た時であります。若し今日の米國大統領ルーズヱルト及び海軍長官ノックスがペルリの如き魂を有つて居るならば、若し彼等が道理と精神とを尙ぶことを知つて居るならば、若しアメリカが唯だ黃金と物質とを尙ぶ國に墮落して居なかつたならば、日本に對して此度の如き暴慢無禮の態度に出で、遂に却つて自ら墓穴を掘る如き愚を敢てしなかつたらうと存じます。

第二日

さて第十九世紀前半のアメリカは、實に急速なる領土擴張の時代でありましたが、其の擴張は植民と征服と買收との三つの方法を以て行はれ、面積は半世紀間に三倍半となつて居ります。此の領土擴張に伴つて當然人口も增加し、是亦約三倍半になつて居ります。而して此の頃から東洋貿易への參加といふことが次第にアメリカの關心を惹き初め、わけても無限の富を包藏すると思はれた支那市場が彼等の大なる誘惑となり、大西洋を横ぎつて阿弗利加を回り、丁度ペルリが取つた航路によつて印度洋及び支那海に至るアメリカ商船は年々其の數を加へて來たのであります。從つて、此の頃はアメリカ造船業の黄金時代でもあり、一八六一年の統計に據りますると、アメリカ商船の總噸數は五百五十四萬噸、イギリスのそれは五百九十萬噸、英米兩國を除く世界諸國のそれが五百八十萬噸、卽ちアメ

リカは世界商船總噸數の三分の一を占め、イギリスと雁行する商船國となつて居るのであります。恰も斯かる時に當り、カリフォルニアに金山が發見され、東部のアメリカ人は言ふ迄もなく、世界各國の人々が、アメリカの太平洋沿岸に殺到して來たので、沿岸一帶は急激なる發展を見るに至りましたが、就中支那勞働者の米國に渡航する者が俄に多數となり、同時に米國商品の對支輸出も次第に盛況に赴いたので、從來の如く大西洋・印度洋を經て支那海に至る迂回路を棄て、太平洋を横ぎつて支那に至る直接航路を開く必要が迫つて來たのであります。

加之、太平洋は今一つの意味でアメリカ人の心を惹き付けたのであります。第十八世紀から第十九世紀にかけて捕鯨はアメリカ及びロシアの最も重要なる產業の一つでありましたが、第十九世紀初頭に至つて大西洋の鯨は殆んど捕り盡され、同時に北太平洋に夥しき鯨の居ることが知られたので、此の方面に於ける捕鯨船の活躍が頓に目覺ましくなりました。殊に一八四二年、米露兩國の間に條約が結ばれ、兩國互に其の領海內に入つて鯨を捕り得るやうになつたので、アメリカ捕

鯨船の日本近海に出沒するもの俄に多くなり、一八四〇年代には既に千二百隻に及んだと言はれて居ります。當時何故に彼等がそれほど捕鯨に熱心であつたかと申せば、蠟燭の原料にする油を取るためであつたのであります。其の頃の歐羅巴は、植民地から搾取した富によつて生活は豪奢となり、各國の宮廷を初め、貴族富豪は競つて長夜の宴を張つて、飲み且つ踊つて居たのであります。其の宴會場を眞晝の如く明るくするために、數限りなく蠟燭を灯したのでありますが、其の蠟燭の白蠟が鯨油から取れるので、贅澤が增せば增すほど、鯨が蠟燭に化けて歐羅巴の金殿玉樓を照らすことになつたのであります。

斯樣な次第で太平洋に出漁する捕鯨船のためにも、暴風や難破の際の救護所又は避難所が必要になり、米支直接航路のためには中間の貯炭所又は食料補給所が必要になり、かくの如き必要のためにアメリカは我國に着目するに至つたのであります。さういふ經緯を經てアメリカに於ける日本訪問の機が次第に熟し、一八五〇年には米國議會が此の事を決議し遂にペルリの日本派遣となつたのでありま

すが、其の時に政府がペルリに與へた訓令の要旨は下の如きものであります。即ち第一にはアメリカ船舶が日本近海で難船し又は暴風を避けて日本の港灣に入つた場合、日本はアメリカ人の生命財產を保護するやう永久的なる和親條約を結ぶこと、第二はアメリカ船舶が燃料食糧の補給のために入港し得る港を選定すること、第三には通商貿易のために二三の港を開かせることであります。

ペルリは日米通商の下地を作つて歸國し、其の後を受けて日米條約を締結したのはハリスであります。此の條約調印のために井伊大老の首が飛び明治維新の機運を激成したことは玆に申上げるまでもありませぬが、私は當時の談判の經緯を仔細に書殘せるハリスの日記から、二三の重要なる箇處を紹介して置きます。先づ彼は『從來幕府の役人は、日本の主權者たるミカドに對して、動もすれば之を輕んずる傾向があつたが、近來は盛んにミカドの絕對權を主張するのを見て、大勢の推移したことが感ぜられる。予は從來將軍を以て事實上の日本の君主と思つて居たが、今やミカドが名實共に主權者にして、將軍は其の假裝的統治者である

やうに思はれ初めた』と申して居ります。これはハリスの談判進行中に俄然として勤皇論が擡頭し來れることを示すものであります。また彼は『日本といふ此の不思議な國の數々の不思議の中で、ミカドの如く予の判斷を苦しめたものは無い』と書いて居ります。此のミカドの不思議は、ひとりハリスのみのことでありませぬ。それは九十年後の今日のアメリカ人に取つても、依然不思議のものとなつて居ります。但し此度の日米戰爭に於ける日本の勝利の根柢を奥深く探ることによつて、或はアメリカ人も初めて此の不思議を理解するに至るかも知れませぬ。私は其の然らんことを切に祈つて止まぬものであります。

さて此の頃のアメリカは、當時の大統領ビューカナンが一八五七年五月、支那使節に任命されたキリヤム・ビッドに與へた敎書に於て『支那に於て我が同胞の通商と生命財產の保護以外には、如何なる目的をも追求せざることを銘記せよ』と述べて居る通り、當時支那に起りつつありし長髮賊の亂に對しても傍觀的態度を取り、ペルリが畫策せる琉球占領計畫をも『面白からぬ提案』として斥け、ま

た之と時を同じうして臺灣を米國の保護領とせよといふ宣敎師バルケルの畫策をも默殺して居ります。時の國務長官シュウォードは、將來太平洋が世界政局の中心舞臺たるべきことを力强く主張したので、歷史家は好んで『シュウォード時代』又は『シュウォード政策』といふ言葉を用ゐまするが、實際に於ては、何等積極的活動を太平洋又は東亞に於て試みて居りませぬ。一八五〇年に至つて一旦は著しく活潑となつたアメリカの太平洋及び支那に對する活動は、一八六一年に始まれる南北戰爭以後、一八九八年のフィリピン占領に至る四十年間、甚だ消極的となつたのであります。

蓋し此の時代は未だ金融資本主義が現れず、帝國主義の未だ確立せられない以前であつたので、歐米の東洋政策、わけても對支政策の領域を支配して居た產業資本は、支那を自國製品の販賣市場として、又は原料生產地として、最大限度に之を利用することを主たる目的として居たのであります。例へば一八六七年、アメリカ政府がロシアからアラスカを買收した時に、國民は政府の帝國主義的動向

を激しく非難し、國内に未だ耕されぬ土地が夥しいのに、何の必要あつて斯樣な無駄な買物をするのか、白熊でも飼ふつもりかと憤つて居ります。また京城駐劄米國公使が、朝鮮に於ける宣教師と共力してアメリカ勢力を京城に扶植せんとした時も、ワシントン政府は該公使に對して『朝鮮の政治に干渉することは貴下の權限外なり』とたしなめて居ります。日清戰爭（一八九四・五年）の時も、時の國務長官グレシャムは『米國は武力を行使し、又は歐羅巴列强と提携して此の戰爭に干渉する意圖なし。米國は表面は好意的中立を守り、內實は日本にのみ好意を寄せんとするものなり』といふ訓令を、京城駐劄公使に與へて居ります。當時のアメリカは、日本の膨脹はアメリカを脅威せずと考へて居たのであります。

而も日清戰爭は東亞政治史全體の偉大なる轉回點となつたのであります。卽ち日本に破れた支那が此の時初めて封建支那の無力と解體とを全面的に暴露せるに乘じて、恰も此の頃に擡頭し來れる帝國主義が、孤立無援の支那を掠奪の對象として、激しく殺到し初めたのであります。而して之と共にアメリカの東洋政策も、

俄然面目を改めたのであります。

さてシュウォードの太平洋制覇の理想は、只今申上げた通り、約半世紀の間、アメリカの具體的政策とはならなかつたのでありますが、彼の理想は一部のアメリカ政治家によつて堅確に繼承されて來たのであります。この理想は一八八〇年代から次第にアメリカに浸潤し初めて來た帝國主義と相結んで、アメリカの東亞政策も漸く積極性を帶びるやうになりました。而して此の新しき帝國主義の最も勇敢なる實行者は、今日の大統領フランクリン・ルーズヱルトの伯父セオドル・ルーズヱルトであり、其の最初の斷行が一八九八年の米西戰爭を好機として、フイリピン群島及びグアム島を獲得したことであります。戰爭の當初に於て、時の大統領マッキンレーは『アメリカはフィリピン群島の强制的併合を行はんとするものに非ず、予の道德的規範によれば、かくの如きは犯罪的侵略なり』と聲明したに拘らず、後には『神意』と稱してフィリピン統治をアメリカに委任することを要求したのであります。その一切の獻立を行つたのが、取りも直さず海軍長官

であつたルーズヴエルトであります。アメリカはスペインの統治に不滿なりしフィリピン獨立運動者を煽動し、之を援助してマニラのスペイン守備隊を攻擊させました。此の時アメリカは數々の約束を彼等に與へたが、彼等を片付けるに足る軍隊がアメリカ本國から到着するに及んで一切の約束を蹂躙し去つたのであります。卽ちフィリピン獨立黨はアメリカに欺かれて、其の手先となつてスペイン軍と戰ひ、然る後に彼等自身も葬り去られたのであります。當時日本の民間にはフィリピン獨立運動に援助を與へた人々も多く、アメリカの惡辣なる手段を痛憤したのでありますが、日本政府は『如何なる國が南太平洋で日本の隣邦となるよりも、アメリカが隣邦となることを欣ぶ』として、米國のフィリピン併合に贊意を表したのであります。

いまやアメリカは『イギリスが香港に據る如く、我等はマニラに據る』と公言し、フィリピンを根城として東亞問題に容喙する實力を養ひ初め、一八九九年には國務長官ジョン・ヘーの名に於て、名高き支那の門戶開放を提唱し、翌一九〇〇年には、支那の領土保全を提唱したのであります。此の二つの提唱は、アメリカ人の言分によれば、或る程度まで利他的政策であり、支那に同情し支那を援助せんとする希望から出たものであるといふのでありますが、それは僞りの標榜であります。第一にヘーは此の政策を提唱するに當つて、毫も支那自身の希望や感情を顧みず、支那政府は門戶開放に同意なりや否やの問合をさへアメリカから受けたことが無かつたのであります。ヘーの提唱は、支那に對するアメリカの權利を一方的に主張したもので、要するに支那はアメリカの同意なくしては如何なる國にも獨占權を與へてはならぬ、關稅率を決めてはならぬ、相互條約を結んでもならぬといふ要求であります。蓋し歐羅巴列强は、アメリカに先んじて支那に於てそれぞれ勢力範圍又は利益範圍を確立して居たので、立遲れたアメリカは、支那に對する自國の政治的・經濟的發展に大なる障碍の橫はれるに當面し、之を撤去するために門戶開放を唱へたのであります。また其の領土保全主義は、支那が列强によつて分割せらるる場合、アメリカの現在の準備と立場では、自分の分前

が甚だ少なかるべきことを知つて居たので、支那に於ける自國の利益を消極的に守るために他ならなかつたのであります。即ちロシア及びイギリスが、既に武力と領土占領の手段によつて其の勢力を支那に張り、殊にロシアの如きは將來も同樣の手段を遂行せんとするに對し、アメリカは門戸開放と領土保全とを提唱する以外、支那に於ける現在及び將來の帝國主義的利益を擁護するために、如何なる現實の手段をも有たなかつたのであります。」

第三日

支那に對するアメリカの門戸開放提唱は、いつも乍らのアメリカ流儀で、甚だ堂々たるものではありましたが、內實は昨日申上げた通り、一ンには支那に於けるアメリカの利益を保護し、また一つには列强の對支進出を消極的に阻止する目的を以て行はれたものであり、其の上此の提唱によつて格別の効果を擧げることも出來なかつたのであります。その提唱者である國務長官ジョン・ヘーが、既に「下の如く申して居ります——『予は支那人に向つて、アメリカに與へて居らぬやうな特權を他國に與へるなと激勵した時に、支那人は文字通り斯う答へた——若し他國が武力に訴へて來た場合、支那だけでは之に抵抗出來ないが貴國は其の時に支那に味方してくれるかと。予は殘念ながら然りと答へることが出來なかつた。茲に米國の根本的弱點がある。我等は支那を掠奪しようと思はないが、他國が支那を掠奪する場合、我國の輿論は武力を以て之に干涉するを許さない。其の上我等は十分なる兵力を有つて居ない。』斯樣な次第でアメリカは東亞進出の準備と態度だけは整へましたが、大體立遲れて居たのでありますから、決して易々と目的を遂げることは出來なかつたのであります。」

但し此頃に至つて太平洋の重要性は何人にも明白になり、第十九世紀に於ける「世界政局の中心は大西洋でありましたが、第二十世紀に入つて舞臺は明かに太平洋に移り、從つて覇を太平洋に稱へることが、取りも直さず世界的覇權を握るこ

とを意味するやうになつたのであります。新興アメリカ精神の權化といふべきセオドル・ルーズヱルトは、最も明瞭に此の間の消息を看取し、一九〇五年六月十七日附で友人B・I・ホキーラーに宛てた手紙の中に、アメリカの將來は、歐羅巴と相對する大西洋上のアメリカの地位によつてに非ず、支那と相對する太平洋上の地位によつて定まるのだと明言して居ります。

然らば太平洋をして世界政局の中心たらしめるのは何故であるか。何が太平洋をして左樣に重大なものたらしめるか。曰く、其の岸に沿うて支那滿蒙が横はつて居るからであります。太平洋を繞る周圍の國々、洋上に浮ぶ大小の島々は、既に歐米列强の領有するところとなり、又は歐米勢力の確立を見たのでありますが、獨り東亞だけに於ては、尙ほ未だ孰れの國の勢力も、絶對に壓倒的ではなかつたのであります。列强が尙ほ競爭角逐を試みる餘地があり、而も尙ほ未だ十分に開發されて居ない厖大なる國土あるが故に、太平洋は限りなく價値あるものとなつて居るのであります。此處には列强が其の工場を養ふべき豐富なる資源が、尙ほ

未だ開發されずに埋もれて居ます。たとへ貧乏であるとは言へ、四億の人口を擁することは、歐米列强に取りて無二の市場であります。例へば昭和初年に於て、日本では毎年一人當り三十八圓づつ外國品を買つて居りますが、支那では僅に三圓七十錢前後、卽ち我國の十分の一に足らぬほどしか買つて居りませぬ。若し支那人が一人當り十圓づつ外國品を買ふやうになれば四十億圓、二十圓づつ買ふやうになれば實に八十億圓の大金が、外國商人の懷に落ちるのであります。加之、支那の國情が安定すれば、資本を投じて是程儲かる國はありませぬ。鐵道一本布くにしても南米などに布いたのでは、鐵道沿線一帶が開拓され盡すまでの何十年間は、猿や鸚鵡でも乘せなければ、荷物も客もないのであります。然るに支那ならば、鐵道開通の明日から、旅客にも貨物にも困らないのであります。斯樣な事情でありますから、支那が歐米列强進出の最大目標となつたことに、何の不思議もありませぬ。それ故にアメリカに取りては、太平洋を支配するといふことは、東亞を支配するといふ意味であります。東亞を支配するといふことは、支那滿蒙

に於ける資源の開發、その廣大なる市場の獲得、その高率なる投資利益に於て、他國よりも優越せる地歩を確立するといふ意味であります。さればこそルーズエルトは、先程の手紙の中に唯だ漠然と太平洋とは申さず、實に『支那と相對する太平洋』と銘打つて居るのであります。而してアメリカの太平洋進出、從つて東亞進出は、日露戰爭直後から初めて大膽無遠慮となつて來たのであります。

總ての攻擊又は進出は、常に抵抗力の最も薄弱だと考へられる方向に向つて試みられます。然らばアメリカは、多年に亙る東亞進出計畫を愈々實行に移すに當つて、何處を最小抵抗と睨んだか。曰く滿蒙であります。日露戰爭によつて國力を弱めて居た日本の勢力圏滿蒙が實にアメリカ進出の目標となつたのであります。

ルーズエルトの調停によつて行はれた日露兩國の講和談判が、尙ほポーツマスに於て進行中のことであります。アメリカの鐵道王と呼ばれたハリマンが、條約によつて日本のものとなるべき南滿洲鐵道を買收するために、一九〇五年八月下旬、祕かに日本に來朝したのでありますが、極力彼に奬めて此の來朝を促したの

は、時の東京駐劄米國公使グリスカムであります。ハリマンが如何なる辯舌を揮つて日本政府を籠絡したかは詳しく存じませぬが、日本は遂に彼の提議を容れて、驚くべき內容を有する覺書が、十月二十日附を以て桂首相とハリマンとの間に成立したのであります。その內容とは、滿鐵及び滿鐵に屬する鑛山其の他各種事業の權利の半ばを、ハリマンの支配するシンヂケートに讓渡し、之に相當する代金を受取るといふことであります。而してハリマンは、此の覺書を手に入れた其の日の午後に、直ぐさま橫濱から船に乘つて歸國の途に上りました。

その丁度三日後に、ポーツマス條約を携へて歸朝した小村全權が、其の覺書を見て驚き且つ憤り、極力反對を唱へて遂に政府を動かし、之を取消させたのであります。日本政府が何故に滿鐵をアメリカに賣る決心をしたかは、我々の今日に至るまで不可解とするところであります。日本は文字通り國運を賭してロシアと戰ひ、多大の犧牲を拂つて勝利を得ましたものの、之によつて日本が獲得せるところのものは、必ずしも大でなかつたのであります。日本國民はハリマンが祕か

に東京に來たところに、講和談判に不平を唱へて燒打の騷動となり、戒嚴令まで布かれたのであります。然るに其の少き獲物のうちから、滿鐵をアメリカに賣つてしまへば、勝利の結果を全く失ひ去るに等しいのであります。當時若し日本國民がハリマン來朝の眞意を知つたならば、その激昂は一層猛烈であつたに相違ありませぬ。想ふにハリマンは、日本が經濟的危機に迫つて居たのに乘じ、講和談判斡旋の恩を笠に着て、日本から滿鐵利權の半分を見事に奪ひ取つたもので、若し小村全權が敢然之に反對しなかつたならば、恐らく日本の大陸發展が、此の時既にアメリカのために阻止されてしまふ筈であつたのであります。

此のハリマンの滿鐵買收策は、極めて大規模なる計畫の一部であつたのであります。その計畫とは、先づ第一に滿鐵を手に入れ、次でロシアの疲弊に乘じて東支鐵道を買收し、かくしてシベリア鐵道を經て歐羅巴に至る交通路を支配し、鐵道の終點大連及び浦鹽から、太平洋を汽船でアメリカの西海岸と結び、大陸横斷鐵道によつて東海岸に至り、東海岸から汽船で大西洋を歐羅巴と結ぶ交通系統、

卽ち世界一周船車聯絡路をアメリカの手に握る第一歩として、滿鐵を日本から買收しようとしたのであります。

さてルーズヱルトが日露の間に立つて講和談判の斡旋をするまでは、是れまで申上げて來たやうに、アメリカは大體に於て常に日本に好意を示して來たのであります。然るにハリマンの計畫一たび失敗するに及んで、日本に對するアメリカの態度は、次第に從前とは違つて來たのであります。それはアメリカが、日本を以てアメリカの東洋進出を遮る大なる障碍であると考へ初めたからであります。茲にアメリカの甚だしき無反省と横暴とがあります。東亞發展は日本に取りて死活存亡の問題であります。さればこそ國運を賭してロシアと戰つたのであります。然るにアメリカの東洋進出は、持てるが上にも持たんとする贅澤の沙汰であります。アメリカは其の贅澤なる欲望を滿たさんがために、日露戰爭によつて日本が東亞に占め得たる地位を、無理矢理奪ひ去らんとしたのであります。實に此の時より以來、アメリカは日本の必要止むなき事情を無視し、傍若無人の横車を押し

初めたのであります。

横車の第一は、日露戰爭の終つた翌年卽ち一九〇六年に、突如當時の東京駐劄代理公使キルソンをして、下の如き提言を日本政府に向つて爲さしめたことであります――『滿洲に於ける日本官憲の行動は、總て日本商業の利益を扶植し、日本人民の爲めに財産權を取得せんとするにありて、是が爲め該地の日本軍隊の撤退を了する頃には、他の外國の通商に充つべき餘地は稀有、若くは絕無たるに至るべく、世界列國の正當なる企業並に通商に對する門戸開放に同意すと雖も、日本從來の僭越なる專權に鑑み、斯の如き行動は合衆國政府の甚だ遺憾とする所なり。日本政府は、露國が嘗て該地方に實質的の國家的統制を爲さんとして失敗せるに鑑み、切に反省せん事を望む。』かういふ亂暴な文句をつけたのであります。十萬の生靈を犧牲にし、二十億の金を使つて、滿洲からロシア勢力を驅逐したのでありますから、此處に日本が商業的發展を試み、有らゆる企業を計畫することは、當然至極のことなるに拘らず、既に日露戰爭の翌年から、アメリカはかやう

な横槍を入れて居ります。

次には翌一九〇七年のことであります。支那に於て事業を營むことを主として居るイギリスのボーリング商會が、祕かに支那と交渉を進め、京奉線卽ち奉天から北京に至る鐵道の一驛新民屯から、先づ北方法庫門に至り、行く行くは北へ北へと延ばしてシベリア鐵道と聯絡する齊々哈爾までの鐵道敷設權を獲得したのであります。當時の奉天のアメリカ總領事は、有名なストレートであります。ストレートは成功しなかつた米國のセシル・ローズと言はれ、一九〇一年コーネル大學を卒業すると直ちに支那に赴き、ロバート・ハートの下に在つて支那海關に三年勤務し、日露戰爭の勃發と共に新聞記者となつて朝鮮に赴き、此處で京城駐劄米國公使に知られ、その私設祕書兼副領事を勤め、其の時に日本來朝の序でに朝鮮を旅行したハリマンと相識り、大いに鐵道王の尊敬を博したのでありますが、一九〇六年僅に二十六歳にして奉天總領事となつて赴任したのであります。ひとりハリマンのみならず、ルーズヴエルトもタフトも、皆なストレートを非常に重ん

じて居ました。

此のストレートは、有らゆる機會を捉へて日本を抑へつけ、アメリカの力を滿洲に扶植する覺悟で着任したのでありますから、ボーリング商會が法庫門鐵道敷設權を獲得しますと、彼は直ちにアメリカを之に割込ませたのであります。此の鐵道は滿鐵と並行して、シベリア鐵道と渤海灣とを結びつけるものでありますから、此の鐵道が布かれることになると、滿鐵は大打擊を受けなければなりませぬ。今日に於ても滿洲農產物の最も多いところは北滿一帶でありますが故に、其處から出る農產物が滿鐵を經ずに、營口又は葫蘆島に出ることになれば、日本は滿鐵を有つて居ても何の甲斐もないことになります。從つて小村全權が北京に於て滿洲善後條約を支那と結んで、下の如く約束して居ります——『支那政府は南滿洲鐵道の利益を保護する目的を以て、自ら該鐵道を回收する以前に於ては、該鐵道の附近に於て、若しくは之に併行して如何なる鐵道をも敷設せず、又該鐵道の利益を害する如何なる支線をも敷設せず。』支那がかういふ約束をして置きながら、

ボーリング商會に法庫門鐵道の敷設を許可することは、疑ひもなく條約違反であります故に、日本は强硬に之に抗議し、遂に支那をして一旦與へた許可を取消さしめたのであります。

さりながらストレートは、決してそれ位のことで思ひ止むものでありませぬ。彼は翌一九〇八年、支那當局者との間に滿洲銀行設立の約束を結んだのであります。當時支那の政治の實權を握つて居たのは袁世凱であります。袁世凱は、日露戰爭前並に日露戰爭中は、我國に非常なる好意を示して居たのであります。それはロシアといふ共同の敵があつたからであります。然るに日露戰爭以後、ロシアに代つて日本が滿洲に勢力を張るに至りますと、今度はアメリカの力を借りて日本の滿洲に於ける發展を掣肘しようといふ方針に變へたのであります。此の袁世凱の親米政策を利用して、ストレートは當時の東三省總督徐世昌及び奉天督辨唐紹儀と相圖り、滿洲に於ける鐵道の敷設並に產業の開發を主目的として、其の金融機關たる滿洲銀行を建てることを承諾させ、二千萬弗借款の假契約を結んで、

欣び勇んでアメリカに歸つて往つたのであります。アメリカは此の銀行を機關として、滿洲に於て日本と角逐して鐵道並に事業を始めようとしたのであります。然るに日本に取つて幸福であつたことには、此の年袁世凱が政變のために失脚し、彼の政敵なりし醇親王が支那の政治を執るやうになりましたので、ストレートの計畫は今度も失敗に終つたのであります。

また此の年卽ち一九〇八年十一月に、アメリカは時の駐米日本大使高平小五郎に對し、日本は滿洲に於て決して他國の事業の邪魔をせぬ、門戸開放・機會均等の主義を忠實に守ると約束せよと提議し、日本をして之を應諾させたのであります。かくして謂はゆる高平・ルート協定の成立を見たのであります。

第四日

（今日も引續きアメリカの横車について申上げます。昨日申上げた通り、アメリ

カは日支兩國の間に滿鐵に並行する鐵道を布かぬといふ約束あることを知つて居たに拘らず、またボーリング商會と合作して企てた法庫門鐵道計畫が失敗したのに懲りず、一九〇九年またもや極祕の間に支那政府と交渉を進め、渤海灣頭の錦州から齊々哈爾を經て、黑龍江省愛琿に至る非常に長距離の鐵道敷設權を得たのであります。此の錦愛鐵道は、此前の法庫門鐵道よりも滿鐵にとつて一層致命的なる並行線であります。此の並行線の敷設權を支那から得たのは、一九〇九年十月のことでありますが、十一月に至りて國務長官ノックスは、先づ英國外相グレーに向つて、二つの驚くべき提案を行つたのであります。第一は英米一體となつて滿洲の全鐵道を完全に中立化させること、第二は鐵道中立化が不可能の場合は、英米提携して錦愛鐵道計畫を支持し、滿洲の完全なる中立化のために、關係諸國を友好的に誘引しようといふのであります。英國外相は此の提案に對して體よき拒絕を與へたに拘らず、ノックスは十二月四日、如上二案を日・支・佛・獨・露の各政府に示し、且つ英國政府の原則的贊成を得たと通告し、此等の諸國に對し

て『同樣に好意ある考慮』を求めたのであります。此の突飛なる提案に對して、日露兩國は固より强硬に反對し、ドイツ・フランス　イギリスもアメリカを支持しなかつたので、此の計畫も亦た復た失敗したのであります。此の計畫の背後にもストレートが活躍して居たのでありますが、其の失敗は『イギリスの冷酷な日和見政策』によるものとして、激しく英國を非難して居ります。

かやうに手を變へ品を變へても成功しないので、アメリカは今度は列强の力を藉りて目的を遂げようといふので、其の前年に成立した英米獨佛の四國借款團を利用することとし、此の借款團から支那に向つて英貨一千萬磅を貸附け、之によつて支那の幣制改革及び滿洲の產業開發を行ふ相談を始めたのであります。是は取りも直さずアメリカ一國では從來やり損つたから、列强と共同して日本を掣肘しようといふ計畫であります。然るに是れ亦日本に取つて幸であつたことは、恰も此の頃に武漢に革命の火の手が上がり、淸朝は脆くも倒潰して支那は民國となつたので、此の交涉も中絕の姿となつたのであります。

然るに新たに出來た民國政府は、此の四國財團に政費の借款を申込んだのであります。此の申込みを受けた四國財團は、日露兩國を無視しては支那との如何なる交涉も無益なることを知つて居たので、結局日露兩國を加へた六國借款團を作ることにしたのであります。その借款契約は一九一三年六月、佛國パリで作られたのでありますが、其の際日露兩國は共に其の滿蒙に於ける各自の特殊權益を損傷されぬことを條件として該財團に參加する旨を聲明し、舊四國財團關係者の反對ありしに拘らず、列國政府が此の聲明を承認したので、六月二十二日正式に六國借款團の成立を見るに至りました。然るに日露兩國がかやうな條件の下に參加して來たのでは、思ふやうに滿洲進出が出來なくなつたので、アメリカは翌一九一四年に至り、六國借款團は支那の行政的獨立を危くするといふ口實の下に、勝手に之を脫退したのであります。

さて一九一四年は世界大戰の始まつた年であります。日本は日英同盟の誼を守り、ドイツに宣戰して聯合國側に參戰しました。するとアメリカの最も恐れたこ

とは、此のどさくさ紛れに日本が支那及び滿洲に於て、火事場泥棒を働きはせぬかといふことであつたのであります。そこでアメリカは此の年八月二十一日、無禮極まる通牒を日本に向つて發して居ります。その文面は先づ『合衆國は日本のドイツに對する最後通牒につき、意見を發表することを見合はすべし』といふので、殆ど日本を屬國視して居ります。日本がドイツに對して最後通牒を發するのに、アメリカから文句をつけられる因緣は、毛頭ないのであります。更に『又歐羅巴の戰爭の狀態如何に拘らず、曾て聲明せる如く、アメリカは絶對に中立を維持することを以て、其の外交政策となす。而して合衆國政府は、日本の意嚮について左の如く記錄するの機會を有す』と豪語したる後、第一に日本は『支那に於て領土擴張を求めざる』こと、第二に『膠州灣を支那に還附する』こと、第三に『支那國内に重大なる動亂若くは事件の發生する場合に於て、日本は膠州灣領域外に於て行動するに先だち、アメリカと協同する』ことを要求して居るのであります。誠に無禮極まる申分でありますから、日頃アメリカに對して妥協的態度に

出ることを習慣として居る日本政府も、此の亂暴なる申分には取合はなかつたのであります。

さうして居るうちに、絶對に中立を維持すると聲明し、戰爭は我等の自尊心の許さぬところだ、We are too proud to fight などと嘯いて居りながら、アメリカも遂に參戰したのであります。當初戰爭に加はらなかつたのは、勝敗の數が逆睹し難かつたからでありましたが、戰局が段々と進んで聯合國側の勝算が略ぼ明かになりますと、存分に漁夫の利を收めるために、以前の聲明などは忘れたかの如く大戰に參加したのであります。いざ大戰に參加して見ると、今までのやうに日本と相爭つて居たのでは、甚だ心がかりになりますので、一九一七年アメリカからの提案によつて謂はゆる石井・ランシング協定が成立し、アメリカは初めて東亞に於ける日本の立場を承認したのであります――『合衆國政府及び日本政府は、領土相接せる國家間には特殊の關係を生ずることを承認す。隨つて合衆國政府は日本國が支那に於て特殊の利益を有することを承認す。日本の領土の接壤する地

方に於て殊に然りとす。』 此の協定によつてアメリカは一時日本の意を迎へたのであります。併しながら此の協定は、後に申上げるワシントン會議に於て、苦もなく廢棄されたことは御承知の通りであります。

一方かくの如く日本の意を迎へながら、アメリカは世界大戰の最中に於ても、滿洲に發展する機會さへあれば、無遠慮に自國の立場を作らうとしました。例へば一九一七年ロシア革命によつてツァー政府が倒潰し、列强がシベリアに出兵することになりました時、アメリカは東支鐵道及びシベリア鐵道の管理權を握るといふ强硬なる主張を列强に向つて發したのであります。是も實に亂暴な提案であります。日本は當然之に反對し、結局聯合國特別委員會を作り、其の委員會が兩鐵道を管理することになりました。

「敍上の如き始末で、日露戰爭以後に於けるアメリカの東亞進出政策は、その無遠慮にして無鐵砲なること、近世外交史に於て斷じて類例を見ざる所のものであります。それは藪醫者が注射もせずに切開手術を行ふやうな亂暴ぶりであります。

而も數々の計畫が其の都度失敗に終つたに拘らず、些かも恥ぢることなく、些かも怯むことなく、矢継ぎ早に横車を押し來るに至つては、言語道斷と申す外ありませぬ。我々はアメリカのかくの如き氣象と流儀とをはつきりと呑込んで置く必要があります。

さてアメリカは、東亞に對しては今まで申上げたやうな傍若無人の進出を試み、只管、東亞に於ける我國の地位を覆へさうと焦つたのみならず、同じく日露戰爭直後から、內に於ては在米日本人の排斥を始めたのであります。卽ち一九〇六年にサンフランシスコの小學校から日本少年を放逐したのを手始めとして、次第に無法なる日本人排斥を行ひ、一九〇七年には數十名のアメリカ人が一團となつて日本人經營の商店を襲擊し、多大の損害を與へるに至つたのであります。小學校から日本兒童を放逐する時の桑港學務局の言分は、日本兒童の數が多くて收容し切れぬこと、不行跡で不品行だといふこと、米國兒童と年齡が違ひすぎるといふ

ことにあつたのでありますが、實際は桑港の全小學校に日本少年は僅に九十三人しか入學して居らず、年齢は多く十四歳以下で、十五歳のものが三十三人、二十歳のものが二人あつただけであり、米人教師の言葉によれば行狀は優秀で、最も好ましき生徒であつたのであります。

カリフォルニアに於けるかくの如き日本人排斥は、甚だしく日本國民を激昂させ、輿論は烈しく沸騰したのでありますが、當時の日本の知識階級の中には、排斥は日本人が惡いからだ、日本人は何處へ行つても日本人で、決してアメリカに同化しないから、アメリカから見れば厄介者に相違ないなどと、まるで他國のことのやうに議論する人が多かつたのであります。而して政府も或る程度までアメリカの言ひ分を通して、此の年十二月に謂はゆる紳士協約をアメリカと結び、向後は在米邦人の父子妻子、及び商人學生を除き、永住の目的を以て、日本人をアメリカに渡航させぬといふ約束をしたのであります。此の日本の讓歩に拘らず、而して其の約束を忠實に守つたに拘らず、カリフォルニアの在留邦人に對する迫

害と排斥とは、年々激しきを加へ來り、一九一一年には日本人の土地所有禁止を目的とする法案が、加州議會を通過するに至つたのであります。

この排日運動は世界大戰中だけは暫く下火となつて居ましたが、一九一八年十一月に世界大戰終結するや翌年正月から亦た復た排日運動が始められ、加州排日協會は下の五事を斷行すべしと決議したのであります。一、日本人の借地權を奪ふこと。二、寫眞結婚を禁ずること。三、紳士協約を廢し、米國が自主的に排日法を制定すること。四、日本人に永久に歸化權を與へざること。五、日本人の出生兒に市民權を與へざること。加ふるに排日法を制定するため、臨時議會を開くべしとの決議案が滿場一致を以て加州議會を通過しました。日本は此の形勢を見て、米國の意を和らぐべく、自ら進んで寫眞結婚を禁止したのであります。

而も日本の讓歩に益ゝ增長せる加州人は、盛んに排日法制定のために臨時議會を召集すべしと高唱し、加州知事の之を拒絶するや、直接州民投票によつて法案を通過せしめ、遂に邦人の借地權を奪ひ、不動產移轉を目的とする法人の社員た

ることを禁じました。而して一九二四年には、更に徹底的なる排日法が制定せられ、且つ實施せらるるに至り、米國の排日派は思ふ存分に其の目的を遂げたのであります。

但し此の日本人排斥は、決して心あるアメリカ政治家の意思ではなかつたのであります。現に大統領ルーズヱルトは其の子カーミットに宛てた手紙の中に『予は痛く對日策に惱まされて居る。加州殊に桑港の馬鹿者どもは、向ふ見ずに日本人を侮辱して居るが、その結果として惹起さるべき戰爭に對して、國民全體が責任を負はねばならぬのだ』と申して居ります。彼は日本人排斥を阻止するために出來るだけの力を盡しましたが、其の事が却つて加州米人を激昂させ、日本人を驅逐すると共に、彼等に味方する非愛國的なる大統領をも放逐せよと騒ぎ立てたのであります。ルーズヱルトは、任期終つて職を去るに臨み、予が加州の日本人問題で苦しんだことを思へば、其の他の議會對策の如きは、物の數でなかつたと述懐して居ります。さればこそ彼は其の政治的後繼者ノックスに向つて、下の如

き賢明なる助言を與へて居ります――『米國の最も重大なる問題は、日本人を米國から閉め出しても同時に日本人の善意を失はぬやうに努めることである。日本の死活問題は滿洲と朝鮮である。それ故に米國は、理由の如何に拘らず日本の敵意を挑發し、また如何に輕微であらうとも日本の利益を脅威する如き行動を決して滿洲に於て取らぬやう注意しなければならぬ。』而もアメリカは此の忠告と反對に、滿洲に於て常に日本の敵意を挑發し日本の利益を脅威する如き行動を繰返して來たことは、是れまで申上げた通りであります。滿鐵中立提議は、ルーズヱルトから敍上の忠告を受けたノックス國務長官の名に於て行はれたのであります。

第五日

東亞に於ては遮二無二日本の地位を覆へさんと焦り、國内に於ては沒義道なる日本人排斥を强行したアメリカは、更に强大なる海軍の建造に着手したのであり

ます。米國に於ける大海軍論の偉大なる先覺者は『歴史に於ける海上權の影響』といふ名高い本を書いたマハン海軍大佐であり之を實行に移したのがセオドル・ルーズヱルトであります。ルーズヱルトは一八九八年三月、即ち彼が海軍長官たりし頃、既に此の書を讀んだ感激をマハン大佐に書き送つて『貴下の著書は、予の心中に漠然として存在して居た思想に、明確なる姿を與へてくれた。予は崇高なる目的のために貴著を研究した』と述べて居ります。而して後年彼が大統領となつた時には『世界第一等の海軍建設を議會に要求することは、大統領たる予の莊嚴なる責任である』と豪語して居ります。彼は强大なる海軍なくしては、アメリカは曾に支那の門戸開放主義を有効に維持し得ざるのみならず、モンロー主義さへも守り得ないと力說し、敵海軍主力の擊滅を第一目的とする大戰艦隊建造の必要を强調したのであります。今日のアメリカ海軍政策は、實にルーズヱルトの精神を繼承し、之を實行しつつあるものであります。從つて彼の誕生日十月二十七日が『海軍日』として記念されて居るのは、決して偶然でないのであります。

かやうにしてアメリカ海軍は、ルーズヱルトの指導の下に强大なる基礎を置かれたのでありますが、一九一四年八月十四日に至り、パナマ運河の開通を見たのであります。此の運河の開通によつて、以前は大西洋岸ハムプトン・ローズ軍港より加州のメーア軍港に到るために、南米大陸を迂回して實に一萬三千浬の航海を必要としたのが、今や五千浬强の距離に短縮され、從つて米國海軍は、其の全力を擧げて大西・太平兩洋の孰れに於ても作戰し得ることとなり、恰も其の艦隊を倍加したと同一の効果を見るに至りました。加ふるに一九一六年には、ダニエル海軍計畫又はキルソン海軍法として知られる偉大なる海軍擴張計畫が着々實行せられ、次で一九一九年には太平洋艦隊の編制を見るに至つたので、太平洋に於けるアメリカの勢力は、俄然として大を加へたのであります。

さて名高きダニエル海軍計畫は、戰艦十隻、巡洋艦六隻を基幹とし、百二十隻に近き驅逐艦及び潛水艦を建造せんとするもので、翌一九一七年より直ちに其の實現に着手しました。此の計畫は痛くイギリスを刺戟しましたが、一層の壓力を

以て我國を脅威したことは申すまでもありませぬ。わけても此の計畫が米國議會に提出された時、責任ある朝野の政治家が、議會の內外に於て試みた該案支持の說明は、異口同音に東亞問題に於ける日米の衝突を力說したので、我國は此の挑戰に對して必然備ふるところ無きを得なかつたのであります。そのためにダニエル海軍計畫が米國議會を通過した翌一九一七年、日本は謂はゆる八四艦隊計畫を樹て、翌年には更に八六艦隊計畫、その翌々年には遂に八八艦隊計畫を樹てざるを得なかつたのであります。此の間の消息は、イギリスの海軍通バイウォーターが其の著『海軍と國家』の中に述べて居る通りであります——『日本は一年以上に亙つて、海上の覇權を握らんとする斷乎たる目的を以て行はれたる米國海軍の大規模の擴張を、不安の念を高めつつ眺めて居た。日本の利害は太平洋に限られて居るが、米國が其の力を集注し來れるは、實に其の太平洋に外ならなかつた。一九一九年八月、米國海軍の最强艦隊が、新たに編制せられたる太平洋艦隊としてパナマ運河を通つて來た。同時に太平洋艦隊根據地の計畫が發表された。フィ

リピン、グアム、サモアに於て、大規模の海軍施設が計畫された。ハワイの眞珠港は、太平洋上のジブラルタルたらしめられんとした。而して日本は、米國のかくの如き海軍行動を以て、自國を目的とせるものと感ぜざるを得なかつた。かくて一九二〇年、日本は名高き八八艦隊計畫を立てて之に對抗した。』

さてかやうにして惹起された猛烈なる製艦競爭に於て、我國の造船工業は、實に其の全力を擧げて奮鬪したのであります。而して之を船臺・船渠・港灣の設備の上から見て、並に造船技術の上から見て、我國は優にアメリカを凌駕して居り、金力だけはアメリカに劣るけれど、其の他の點では明白に我國が勝利の地步を占めて居ました。アメリカは此の競爭の容易ならぬ性質を漸く判然と看取し得たのであります。

加ふるにアメリカの海軍計畫は、ひとり日本のみならず同時にイギリスの海軍擴張をも促さずば止まなかつたのであります。アメリカ如何に富めりとは言へ、日英兩國を相手に取つての競爭は無謀と申さねばなりませぬ。其の上世界大戰に

よるアメリカの好景氣も、いつまで續く筈のものでありませぬ。一朝經濟的不況に陷つた時、莫大な經費を海軍に奪はれることは大なる苦痛となります。かくてアメリカは、自ら招ける苦境から脱出すべく、茲に軍備制限を議する國際會議を召集し、之によつて日英兩國の海軍を掣肘すると同時に、東亞に於ける日本の勢力を失墜させ、以て東洋進出の路を平坦ならしめることを考へたのであります。一九二一・二二年のワシントン會議は斯くして開かれ、アメリカは此の會議によつて見事に一石二鳥をせしめたのであります。

ワシントン會議は、ロンドン・タイムス主筆スティードが道破した通り、其の本質に於てまさしく『日米兩國の政治的決鬪』であつたのであります。而して此の決鬪に於てアメリカは、先づ第一に其の最も好まざりし日英同盟を破棄させて、日本を國際的に孤立させることに成功しました。第二に日本海軍の主力艦を自國並に英國のそれに對し、六割に制限し去ることに成功しました。わが全權は、英米海軍主力艦に對する七割のそれを以て、日本國防の最小限度なりとし、極力米

國案に反對したに拘らず、英米兩國の共同作戰によつて、遂に太平洋西部の防備制限を交換條件として、國防の『最小限度』以下の比率を承諾したのみならず、加藤全權は下の如き驚くべき聲明までもしたのであります——『日本は過去に於て之れ無かりし如く將來に於ても、其の力に於て合衆國若くは英國と其の程度を同じうする一般的海軍設備を保有することを要求するの意思を有せず。』此の聲明は頗る英米人の喝采を博したさうであります。

日本を孤立せしめ、其の海軍を劣勢ならしめたアメリカは、更に四國條約の締結によつて、西太平洋に於ける自國領土の安全を圖りました。この條約はもとも と日英米三國の間に結ばるべく、その成立と同時に日英同盟を太平洋の藻屑とする魂膽でありましたが、フランスの面目を立てるために之を誘ひ入れて四國條約としたものであります。オランダの如きは西太平洋に於てフランスよりも遙に重大なる利害關係を有して居るに拘らず之を加入させぬところを見ても、此の條約の不眞面目さを窺ひ知ることが出來ます。條約の要旨は其の第一條に盡されて居

ります――『締約國は、太平洋方面に於ける其の島嶼たる屬地及び領地に關する各自の權利を、互に尊重すべきことを約す。若し締約國の何れかの間に、太平洋問題に起因し且つ前記の權利に關する爭議を生じ、外交手段によつて滿足なる解決を得ること能はず、且つ其の間に現存する圓滿なる協調に影響を及ぼす虞ある場合には、右締約國は他の締約國の共同會商を求め、當該事件全部を考量調整のため、其の議に附すべし。』而して此の條約の第四條に於て『一九一一年七月十三日、ロンドンに於て締結せられたる大ブリテン國及び日本國間の條約は、之と同時に終了するものとす』と明記して日英同盟に最後の引導を渡して居ります。

『日本はワシントン會議に於て、山東問題に關してはエルサイユ條約によつて得たる權利をさへも犧牲にして、殆んど無條件に之を支那に還附しました。石井・ランシング協定の廢棄にも同意しました。而して支那に關する九國條約が、米・て、白・英・佛・伊・日・蘭・葡の九國間に、實にアメリカが欲する通りの內容を以て成立しました。此の條約は『支那の全領土に亙り一切の國民の商業及び工業に

對する機會均等主義を有効に樹立維持するために努力する』こと、また『友好國の臣民又は人民の權利を減殺すべき特殊權利、又は特權を獲得するために支那の情勢を利用せざる』ことを定め、更に、締約國にして『本條約の規定の適用問題に關係し、且つ右適用に關し討議をなすことを適當なりと認むる事態發生したる時は、何時にても右目的のため、關係締約國間に十分且つ隔意なき交渉をなすべきこと』を取極めたものであり、アメリカは此の條約によつて、少くも形式的には、我國の支那殊に滿蒙に於ける特殊權益を剝奪し去つたのであります。

かくてワシントン會議は、太平洋に於ける日本の力を劣勢ならしめることに於て、並に東亞に於ける日本の行動を掣肘拘束することに於て、アメリカをして其の對東外交史上未曾有の成功を收めさせたのであります。米國が東洋に向つて試みた幾度かの猛突的進出は、その都度失敗に終りましたが、ワシントン會議に於ては、曾て欲して得ざりしことを、一應は成し遂げたのであります。當時アメリカ人が上下を擧げて喜んだのも當然であります。

而もアメリカは之を以ても滿足しなかつたのであります。アメリカはワシントン會議によつて日本の戰鬪艦を制限し得たのでありますが、それだけでは未だ枕を高くして眠ることが出來ない。アメリカと日本の如く、極めて遠隔な距離を隔てて相對して居る間柄では、大きい巡洋艦が時として戰鬪艦以上の効力を發揮することがあります。かくてアメリカが主動者となつて、今度は主力艦以外の軍艦制限の目的を以て召集されたのが、ジュネーヴ會議及びロンドン會議であります。而して此の二つの會議に於ても、日本はワシントン會議に於けると同じく、アメリカの前に屈服したのであります。但しアメリカに屈服したのは日本だけではありませぬ。實にイギリスまでがアメリカの前に頭を下げ、アメリカよりも劣勢なる海軍を以て甘んずることになつたのであります。これは世界史に於ける非常の出來事と申さねばなりませぬ。大ブリテンは海洋を支配すと高嘯して、世界第一の海軍を國家の神聖なる誇りとして來たイギリスが、今や其の王座をアメリカに讓つたのであります。

茲で我等は心靜かにアメリカの國際的行動を觀察して見たいと存じます。自ら國際聯盟を首唱し乍ら、其の成るに及んで之に加はることをしない。不戰條約を締結して、戰爭を國策遂行の道具に用ゐないといふことを列强に約束させて置きながら、東洋に對する攻擊的作戰を目的とする世界第一の海軍を保有せんとする。大西洋に於ては英米海軍の十對十比率が、何等平和を破ることないと稱しながら、太平洋に於ては日米海軍の七對十比率さへ尙ほ且つ平和を脅威すると力說する。ラテン・アメリカに對しては門戸閉鎖主義を固執しながら、東亞に對しては門戸開放主義を强要する。例へば往年邦人漁業者が、メキシコのマグダレナ灣頭に土地を租借しようとした時、之を以て米國のモンロー主義に反するものとせる決議案が、アメリカ上院を通過して居ります。然るに東亞に於ては、日本の占め來れる地位は、米國がメキシコ又はニカラグァに於て占むる勢力の十分の一にも及ばざるに拘らず、門戸開放主義の名に於て之をしも否定し去らんとするのであります。總じて、是れ無反省にして而も飽くなき利己主義より來る矛盾撞著の行動で

あります。

アメリカの亂暴狼藉是くの如くなるに拘らず、世界の如何なる一國もアメリカに向つて堂々と其の無理無法を糾彈せんとする者がなかつたのであります。我國の如きもロンドン會議に於て、當に補助艦比率の十對十を主張して何の憚る所なかりしのみならず、ワシントン會議以後の情勢變化、及び不戰條約の精神を楯として、主力艦六對十の比率變更をさへ要求し得たに拘らず、當初から七對十の比率を以て甘んじ、而も其の主張さへアメリカのために拒否されて、一層の劣勢を以て甘んじたのであります。總て此等の會議は、簡單に軍縮會議と呼ばれて居りますが、決して單純なる海軍會議ではありませぬ。三十年に亙る執拗極まりなきアメリカの東亜政策全體を顧みることによつて、此等の會議の眞實の意味を、初めて正しく理解し得るのであります。

我等は意氣揚々としてロンドン會議を引上げたアメリカ代表スティムソンが此の年五月十三日、上院外交委員會に於て下の如き説明を試み、口を極めて日本代

表及び日本政府を賞揚したことを今日と雖も忘れることが出來ませぬ——『我等合衆國代表の眼目とせる所は、我が海軍が日本海軍を凌駕すべき製艦計畫を完成するまで八年間、日本をして現勢力のままに在らしめる事であつた。六吋砲巡洋艦に關しては、我等は我が保有量を七萬五千噸より十四萬三千噸に擴張するまで、日本は現狀を維持すべきことを要求した。我國は、此の條約によりて六吋砲巡洋艦を倍加し得ることになつたに拘らず、日本は現在保有する九萬八千噸より僅に二千噸を擴張し得るに過ぎない。日本は本國に於て海軍擴張論者の猛烈なる運動あり、海軍當局は國民の支持後援を得て居た。それ故に予は、日本代表はロンドン會議に於て非常に困難なる仕事を成し遂げたと斷言する。我等は、日本が勇敢にも其の敵手が自國を凌駕するまで其の手を縛る如き條約を承認せる事に對し、その代表及び政府に最大の敬意を拂ひつつ、會議から引上げて來た。我等は故意に潜水艦を日本と同等にした。之は潜水艦の總噸數を縮小すれば、それだけ我國を有利に導くからである。而して日本は一萬六千噸の縮小に同意した。』

ロンドン會議に於ける日本代表及び日本政府は、アメリカ代表から『敵が自分よりも優勢なる艦隊を建造するまで、自分の手を縛られるやうな條約に調印した』と言つて、其の『勇敢』を賞めそやされたのであります。その日本代表は、ロンドンから歸ると、日本國民に向つて會議の成功を語り、首相は議會に於て、國防の安全を保證して居たのであります。痛憤に堪へなかつた私は、我等の機關誌であつた月刊『日本』の此の年の五月號に『ロンドン會議の意義』と題する一文を發表し、其の末尾を下の如く結んで居ります。

『ロンドン會議は、若しそれが單獨に海軍協定のためのものであるならば多少の讓歩は之を忍び難しとせぬ。唯だそれ四半世紀に亙る米國東洋政策遂行の歴史を觀る時、而してその歴史の行程として此の會議を觀る時、既にワシントンに於て讓り、いままたロンドンに於て讓るならば、やがて一層大なる讓歩を強要せらるべきこと、火を睹るよりも瞭らかである。繰返して述べたる如く、米國の志すところは、如何なる手段を以てしても太平洋の覇權を握り、絶對的に優越せる地

歩を東亜に確立するに在る。そのために日本の海軍を劣勢ならしめ、無力ならしめ、然る後に支那滿蒙より日本を驅逐せんとするのである。日本にして若し適當なる時期に於て、是くの如き野心の遂げらるべくもなきことを米國に反省せしむるに非ずば、米國の我國に對する傍若無人は、年と共に激甚を加へ來り、つひに我國をして米國の屬國となり果てるか、然らずば國運を賭して之と戰はねばならぬ破目に陷らしむるであらう。ロンドン會議は日本の覺悟を知らしむる絶好の機會なりしに拘らず、つひに之を逸し去つた。』

第六日

ロンドン會議は、日本現代史に對して深刻無限の意義を有して居ります。第一次世界戰このかた、日本の上下を支配して來た思想は、英米を選手とせる自由主義・資本主義と、ロシアを選手とせる唯物主義・共産主義であります。深く思を

國史に潛め、感激の泉を莊嚴なる國體に汲み、眞箇に日本的に考へ、日本的に行はんとする人々は、たとへあつたにしても其の數は少く、其の力は弱かつたのであります。然るにロンドン會議は、曾に此等少數の人々のみならず、多數の國民の魂に强烈なる日本的自覺を喚び起す機緣となつたのであります。而してロンドン會議の責任者濱口首相は、遂に國民義憤の犧牲となつたのであります。日本はワシントン會議以來、アメリカとの政治的決鬪に於て、常に敗け續けて來たのであります。いまやロンドン會議に勝誇れるアメリカを見て、此の上敗けては遂に息の根が止められるぞといふ大なる憂が國民の魂の底から湧上つて來たのであります。それは我等の先輩が黑船の脅威によつて、幕府も忘れ各自の藩も忘れて尊皇攘夷のために奮ひ起つたと同じことで、米國國務長官スティムソンは、百年以前にペルリが日本に對して勤めた同じ役割を勤めたのであります。

ロンドン會議に至るまで、日本はアメリカの東洋進出に對して受身であり、アメリカの對日政策に對して常に讓步して來たのであります。そのアメリカの政策

が餘りに傍若無人であつたために、アメリカの政治家のうちにさへ、日本の憤激を買つて戰爭を誘發せぬかと心配した人が少くなかつたほどであります。例へば加州に於ける排日問題の時でも、大統領ルーズエルトは、日本人は斯くの如き侮辱を甘受する國民でないと信じて居たので、フィリピン陸軍司令官ウッドに對し、何時日本軍の攻擊を受けても戰ひ得るやう準備せよといふ命令を發し、而も萬一日米戰爭になればフィリピンは日本のものとなるであらうと甚だ憂鬱であつたのであります。そして心配に堪へ兼ね、フィリピン派遣といふ名目で陸軍長官タフトを東京に寄越したのでありますが、タフトが來て見ると、國民こそ激しく憤慨して居りましたが、政府は毛頭左樣なことを考へて居りませぬ。そこでタフトは東京から『日本政府は戰爭回避のために最も苦心を拂ひつつあり』と打電して、ルーズエルトの愁眉を開かせて居ります。其の後十數年を經て、移民問題が再び日本國民を憤激させた時も、餘りに日本の體面を傷けては戰爭になるかも知れぬと心配した米國政治家が少くなく、當時の駐日米國大使モリスの如きも其の一人

であります。但し此の時も日本政府は、干戈に訴へても國家の面目を保たうなどとは夢にも考へて居なかつたのであります。最後に一九三四年埴原大使をして、無法に日本人排斥法を通すならば『重大なる結果』を生ずるだらうと抗議させましたが、却つて上院議員ロッジのために『日本はアメリカを脅迫するつもりか』と開き直られ、もともと覺悟を決めての抗議でなかつたのでありますから、結局如何なる結果をも生ぜずに濟みました。

然るにロンドン會議以後、事情は全く一變したのであります。政府は依然として英米に氣兼ねしながら、國際的歩みを徐々に進めんとしたに拘らず、國民は日本國家の根本動向を目指して濶歩し始めたのであります。政府はロンドン會議に於て低く頭を下げたに拘らず、國民は昂く頭を擡げて、アメリカ並びに全世界の前に、堂々と進軍を始めたのであります。此の日本の進軍は、實に滿洲事變に於て其の第一歩を踏み出したのであります。

一九二八年、父張作霖の後を繼いで滿洲の支配者となれる張學良は、南京政府

及び多年に亙るアメリカの好意を背景として、東北地帶に於ける政治的・經濟的勢力の奪回を開始したので、滿洲に於ける日本の權益に對する支那側の攻擊は年と共に激化し、排日の空氣は全滿に漲らんとするに至りました。もと滿洲に於ける日本の權益は、ポーツマス條約に基くものであります。若し當時日本が起つてロシアの野心を挫かなかつたならば、滿洲・朝鮮は必ずロシアの領土となつたであらうし、支那本部もやがて歐米列强の俎の上で料理されてしまつたことと存じます。日露戰爭に於ける日本の勝利は、曾にロシアの東洋侵略の歩みを阻止したのみならず、白人世界征服の歩みに、最初の打擊を加へた點に於て、深甚なる世界史的意義を有して居ります。此の時以來日本は、朝鮮・滿洲・支那を含む東亞全般の治安と保全とに對する重大なる責任を荷ひ、且つ其の重任を見事に果たして來たのであります。其の間に如何にアメリカが日本の意圖を理解せず、日本の理想を認識せず、間斷なく亂暴狠藉を働きかけて來たかは、三日に亙つて述べた通りであります。此のアメリカの後援を頼み、南京政府の排日政策に呼應せる滿

洲政權は、遂に暴力を以て日本に挑戰し來つたのであります。それは取りも直さず一九三一年九月十八日の柳條溝事件であります。而して時の政府が斷じて之を欲せざりしに拘らず、日本全國に澎湃として漲り初めた國民の燃ゆる精神が、遂に滿洲事變をして其の行くべきところに行き着かしめ、大日本と異體同心なる滿洲國の莊嚴なる建設を見るに至つたのであります。

我等は滿洲事變が、斯くの如き事變の發生を最も憎み且つ恐れて居た幣原氏が、日本の外交を指導しつつありし時代に起つたことを考へて、歴史の皮肉を想はざるを得ぬものであります。併し乍ら滿洲事變は、決して日本に取りて不利なる時期に起つたのではありませぬ。運命は明かに日本に向つて微笑して居たのであります。即ち此の事變の起つた一九三一年の夏の末には、世界を擧げて大不景氣の影響を深刻に感ぜざりしは無く、わけてもイギリスとアメリカは、歐羅巴及び本國に於て、經濟的混亂に陷つて居たのであります。即ち此の年は信用機關の沒落、イギリスの金本位制離脱、フーヴー大統領のモラトリウムなど、歐米の政府及び

國民をして、途方に暮れしめた重大問題の頻發した年であります。さればこそスティムソンは、其の著『極東の危機』の中で『若し誰かが、外國の干渉を受けずに濟むと考へて、滿洲事變を計畫したとすれば、無上の好機會を掴んだものと言はねばならぬ』と申して居ります。滿洲事變はそれほど國際的に好都合の時に起つたので、日本のためには甚だ幸運であつたと存じます。

但しアメリカは勿論手を拱いて見て居るわけはありませぬ。國務長官スティムソンは事變勃發の四日後、即ち九月二十二日に駐米日本大使を經て謂はゆる『熱烈なる覺書』を日本政府に交付して居ります。その中で彼は『過ぐる四日間、滿洲に於て展開せられつつある事態には、夥しき數の國々の道德・法律及び政治が關係して居る』と、威丈高になつて居ります。其の後に至り滿洲事變に對して執つた國際聯盟の行動は、一としてスティムソンと相談しなかつたものがなく、また其の指圖に由らぬものがなかつたのであります。當初スティムソンは、幣原外相に大なる期待をかけて居ました。國際聯盟、四國條約、九國條約、不戰條約、

總じて此等の世界現狀維持のための約束に欣然參加し來れる日本の外務省は、此度とてもアメリカの意圖を無視した行動を取るまいと考へて居たのであります。これは決して私の想像でなく、スティムソン自身が同年九月二十三日、卽ち『熱烈なる覺書』を日本に叩き付けた翌日の日記に『予の問題は、アメリカの眼が光つて居るぞといふことを日本に知らせること、及び正しい立場に在る幣原を助けて彼の手によつて事件の處理を行はしめ、之を如何なる國家主義煽動者の手にも委ねてはならぬといふことである』と書いて居ります。スティムソンは、之も彼自身の言葉によれば、日本の外務大臣が日本に燃え上つた國家主義の炎々たる焰を消し止め、過去及び現在の征服を中止して、日本をして九國條約及び不戰條約に再び忠實ならしむべきことを希望し、且つ其の可能を信じて居たのであります。而して幣原外相も恐らく此の希望に添ひたかつたに相違ありませんが、事變の發展はスティムソンの希望を完全に打碎き、彼は矢繼ぎ早に『不愉快なるニュース』のみを受取らねばならなかつたのであります。而して此の年の十二月に民政黨內

閣が倒れ、翌一九三二年一月、日本軍が錦州を占領するに及んで、スティムソンは遂に『談合によつて滿洲問題を解決せんとした予等の企圖は失敗に終つた』と告白して居ります。而して今度は『滿洲の平和攪亂者に對して、全世界の道德的不同意を正式に發表する手段を取り、若し可能ならば日本の改心を要求する壓力となるべき制裁を加へる』と決心したのであります。

彼は此の目的のために國際聯盟を利用せんとしたのであります。國際聯盟は、スティムソンの屬する共和黨とは反對の政黨、卽ち民主黨の大統領キルソンを生みの親とし、而も共和黨のために勘當を受けたる子供であります。然るに今や共和黨の國務長官が、自ら勘當した子供を日本制裁のために働かせようとして、一切の鞭撻と激勵とを與へたのであります。彼は一九三二年春、カリフォルニアとハワイとの間に於て、全米國艦隊の大演習を行はしめ、演習終了後も之を太平洋に止めて日本を威嚇しました。而して一方絕えずロンドンとジュネーヴに壓力を加へ、此の年三月十二日には、聯盟總會をして二月十八日に獨立を宣言せる滿洲

國に對し、不承認の決議をなさしめました。而して此の年十一月末には、國際聯盟は謂はゆるリットン報告に基いて、日本に對して滿洲を支那に返還せよといふ宣告を下したのであります。其の後此の宣告を繞つて長い劇的な討論が行はれましたが、遂に我が松岡代表が『歐羅巴やアメリカの或る人々は、いま日本を十字架にかけんとして居る。而も日本人の心臓は、恫喝や不當なる抑制の前には鐵石である』と叫んで、日本の決意を世界萬國の前に聲明したのは、英米に對する宣戦詔勅の渙發せる十二月八日と、日も月も同じ十年前の十二月八日であります。而して翌一九三三年二月十四日、リットン報告書が遂に聯盟總會によつて採擇せらるるに及んで、松岡代表は即刻會場を退出し日本は立どころに國際聯盟を脱退したのであります。國際聯盟は言ふまでもなく世界舊秩序維持の機關であります。それ故に我々は、復興亞細亞を本願とすべき日本が、世界の現狀即ちアングロ・サクソンの世界制覇を永久ならしめんとする斯くの如き機構に加はることに、當初より大なる憤りを感じて居たのであります。然るにスティムソンの必死の反日

政策が、日本をして國際聯盟より脱退せしめる直接の機緣となつたことは、是れ亦歴史の皮肉と申さねばなりませぬ。

さてスティムソンは、一九三二年十二月下旬、次期大統領に選ばれたフランクリン・ルーズヱルトから、外交政策に就いて相談したいからと云ふ招待を受け、紐育ハイド・パークのルーズヱルト邸で、長時間の會談を行ひましたが、其の後數日を經てルーズヱルトは、米國の對外政策に於て兩者の意見は完全に一致したことを發表して居ります。從つて現大統領の東亞政策又は對日政策が、スティムソンのそれと同一なるべきことは、既に此の時より明白であつたのであります。スティムソン政策の據つて立つところは飽までも九國條約及び不戰條約を尊重し、之に違反する行動は總て不法なる侵略主義と認め、徹底して之を彈劾するといふのであります。從つて此の政策を完全に繼承せるルーズヱルトは、今回の支那事變に際しても、當初より日本の行動を不法と斷定し、支那の抗戰能力强化を一貫不動の方針として、有らゆる援助を蔣介石に與へて來たのであります。此の事は

ルーズヴェルトが、一九三七年十月五日、シカゴに於て試みたる最も煽動的な演說の中に、極めて露骨に言明されて居ります――『條約を蹂躙し、人類の本能を無視し、今日の如き國際的無政府狀態を現出せしめ、我等をして孤立や中立を以てしては之より脫出し得ざるに至らしめし者に反對するために、アメリカはあらゆる努力をなさねばならぬ。』而してまさしく此の言明の通り、日米通商條約を廢棄し、軍需資材の對日輸出を禁止し、資金凍結令を發布して、一歩一歩日本の對支作戰繼續を不可能ならしめんとすると同時に、蔣政權の抗戰能力を强化するためには、一切の可能なる精神的並びに物質的援助を吝まなかつたのであります。

日本は若しアメリカが東亞に於ける新秩序を認めさへすれば東亞に於けるアメリカの權益を出來るだけ尊重し、且つアメリカの謂はゆる門戸開放主義も、此の新秩序と兩立し得る範圍内に於ては十分に之を許容する意圖を有つて居たのであります。然るにアメリカは、東亞新秩序建設を目的とする我國の軍事行動を以て、飽までも九國條約・不戰條約に違反する侵略行爲となし、頑として其の見解を改

めざるのみならず、東亞新秩序はやがて世界新秩序を意味するが故に、斯くの如き秩序――アングロ・サクソン世界制覇を覆すに至るべき秩序の實現を、その根柢に於て拒否するのであります。而も斯くの如きは決して現大統領の新しき政策に非ず、實にアメリカ傳統の政策であります。卽ちシュウォードによつて首唱せられ、マハンによつて理論的根據を與へられ、大ルーズヴェルトによつて實行に移された米國東亞侵略の必然の進行であります。此の傳統政策あるが故に、日米兩國の衝突は遂に避く可からざるものであり、今や來る可き日が遂に來たのであります。

弘安四年蒙古の大軍が多々良濱邊に攻め寄せた時、日本國民は北條時宗の號令の下、立どころに之を擊退しました。いまアメリカが太平洋の彼方より日本を脅威せる時、東條内閣は斷乎膺懲を決意し、緒戰に於て海戰史上振古未曾有の勝利を得ました。敵北より來れば北條、東より來れば東條、天意か偶然か、目出度きまはり合せと存じます。熟々考へ來れば、ロンドン會議以後の日本は、目に見

—6.12 D—

えぬ何者かに導かれて往くべきところにぐんぐん引張られて往くのであります。此の偉大なる力、部分部分を見れば小さい利害の衝突、醜い權力の爭奪、些々たる意地の張合ひによつて目も當てられぬ紛糾を繰返して居る日本を、全體として見れば、何時の間にやら國家の根本動向に向つて進ませて行く此の偉大なる力は、私の魂に深き敬虔の念を喚び起します。私は此の偉大なる力を畏れ敬ひまするが故に、聖戰必勝を信じて疑はぬものであります。

英國東亞侵略史

第一日

地中海が商業交通の中心であり、歐羅巴の商權がイタリーの町々とハンザ同盟の手に握られて居た頃のイギリスは、歐羅巴の片隅に位する弱小なる國家にすぎなかつたのであります。然るにアメリカ大陸の發見及び印度航路の發見が、大西洋を以て第二の地中海たらしめるに及んで、運命はイギリスに向つて微笑し始めたのであります。イギリスは此の重大なる歴史の轉回期に於て、一面には群島內部に於ける國家的統一を成就し、他面には是までのフランス侵略政策を棄てて其の國是を海洋並びに海外に對する發展に向け始めたのであります。而して之と共にイギリスの地理的特徴が、俄然として其の意義を發揮し來り、世界制覇のため

の最も有利なる條件となつたのであります。

まづイギリスは海によつて圍まれた島國でありますが故に、外國との直接の軋轢を免れ、歐羅巴大陸諸國の如く、重大なる犧牲を國境戰爭に拂ふ必要がなかつたので、かくして節約された國力を、存分に海上の活躍に用ゐることが出來ました。而して其の位置は、一面に於て歐羅巴といふ選ばれたる大陸に面して居り、エルベ河よりセーヌ河に到る大陸の大きい河々は、總てイギリスに向つて注いで居ります。而して他面に於ても同じく選ばれたる海大西洋に面し、その著しく發達せる海岸線は、此の國のために無數の港灣を提供して居ります。かくしてヴスコ・ダ・ガマ及びコロムブス以前に於ては、僅に歐羅巴の片隅の一歩哨に過ぎなかつた此の國が、今や歐羅巴大陸の運命を海洋の上に展開する自然の開拓者となつたのであります。

かくの如くイギリスの地理的特徴が、まづ列國に先んじて世界的舞臺に活動する機會をイギリスに與へたのでありますが、經驗主義・個人主義・功利主義を以

て其の本質とするイギリスの國民性も、また此の發展に好箇の條件となつたのであります。ルーテルの宗教改革は、ローマ教會の束縛から個人を解放したものでありますが、イギリスの徹底せる個人主義的國民性は、此の宗教改革が生んだ個人解放の成就のための最も都合よき下地となつて居ります。此の國民性のためにイギリスは、其の他の歐羅巴諸國が尙ほ未だ教會と僧侶との束縛に對して惡戰苦鬪して居る間に、國民として逸早く中世期的權威を破壞し、諸國に先んじて自由に其の力を世間的活動に用ゐたのであります。のみならず飽までも事實と經驗とを重んずる國民性でありますから、エマソンが申して居る通り、常に想像のために戰はずして實際の利益のために戰ひ、その精力を實際的活動に向つて集注させたのであります。其の上イギリスの氣候風土が、イギリス人の體力を健全强壯ならしめ、堅忍不拔の意志を鍛錬し、善戰健鬪の精神を養成して居ります。

また彼等に取つて甚だ好都合であつた事は、ピューリタンの教義が、彼等の世間的勤勉や金儲けに對して、宗教的・道德的基礎を與へてくれたことであります。

單にイギリスと言はず、總て北方に國を建てる民は、險惡なる風土と戰つて自己の生存を維持し發展させねばなりませぬ。そのためには榮養に富む食物、溫暖なる着物、堅牢なる家屋が必要であります。從つて營々孜々として利を營むことが、一個の美德と考へられるやうになるのであります。ピューリタンも其の通りで、此の宗敎は其の名の如く一面にはイギリス人に克己制欲の生活を要求すると同時に、他面には勤勉と營利の精神を鼓吹したのであります。それ故にイギリス人は、道德的義務を遂行する心持で金儲けに身を委ねることが出來ました。キリストは、神と黃金とに兼ね仕へることが出來ないと申しましたが、イギリス人は安んじて神と黃金とに兼ね仕へることが出來たのであります。かやうにしてイギリスは、國を擧げて營利に沒頭し、その經濟的勢力を海外に扶植して行つたのであります。而して其の勢力圈の驚くべき擴大に伴ひ、民族としての自尊心と自信も次第に昂まり、限りなき膨脹的本能と、之に相應する發展的性質を養ひ上げて、つひに古代ローマ帝國以來、未だ曾て見ざる支配民族となつたのであります。

今日のイギリス人は、口を開けばイギリスの世界的覇權が平和の間に確立されたかの如く主張しますが、それは僞りであります。世界制覇の志を抱いたのは、決してイギリスのみのことでなく、他の歐羅巴諸國も同然でありましたから、イギリスは之と死活の戰を戰ひ通して其の目的を遂げたのであります。唯だ此處に注意すべきことは、世界制覇のための戰が、海洋の上で又は海外に於て戰はれたよりも、寧ろ多く歐羅巴大陸に於て行はれたこと、及びイギリスのために戰つたのが、英國自身の軍隊よりは、寧ろ戰費をイギリスに仰いだ同盟國の軍隊であつたといふことであります。而してイギリスが常に其の敵として戰つたのは、海上並びに海外に於ける最も强く最も恐るべき競爭國であり、力弱い競爭者に對しては原則として親善なる態度を取り、攻擊の全力を最も强大なる敵國の上に加へて來たのであります。而も一旦之を擊破して最早危險ならざる程度に打ちのめした後は、努めて之と親善なる關係を回復し、來るべき機會に更に新しき競爭國と戰ふ場合に、却つて之を自國の同盟者たらしめるやうにしたのであります。

近代英國が第一に選んだ相手はスペインでありましたが、一五八八年、これは我國では羽柴秀吉が太政大臣となつて豐臣と云ふ苗字を名乘り始めた年であります――此の年にイギリスは英國海峽に於ける三日の奮戰によつて、見事敵の無敵艦隊を粉碎し、徹底してスペイン制海權を覆し、百年に亙るイベリア國民の優越を沒落せしめて、玆にイギリス海上發展の第一の基礎を築いたのであります。

次にイギリスは第二の敵手としてオランダを選びました。其の戰はオリヴー・クロムウエルの雄渾なる精神と鐵石の意志から進つた一六五一年の航海條例によつて最も無遠慮にオランダに對して挑まれ、一六五二年から一六七四年の間に行はれた三度の戰爭によつて、是まで『海洋の幸福なる所有者』と謳はれたオランダは、其の優越なる制海權を苦もなくイギリスに奪はれてしまつたのであります。

オランダを雌伏させたイギリスは、第三の敵手としてフランスを選びました。イギリスは、一六八八年から一八一五年に至る百二十六年のうち、實に六十四年間は戰爭を以て終始して居ります。地球上のいづれの國民も、是ほど頻々と戰爭

に參加したものはありませぬ。此の間の數々の戰爭は、その本質に於ては悉く歐羅巴大陸並びに植民地に於けるイギリスとフランスとの爭覇戰であります。而して此の百年を超えたる長き英佛爭覇戰は、ナポレオンの最後の敗戰によつて、遂にイギリスの勝利を以て終りを告げたのであります。

かやうな次第でありますから第十九世紀の英國史は、もはや前世紀の歷史とは面目を異にし、歐羅巴列强との爭覇戰は終りを告げ、海上に於ては世界無敵の覇者となり、植民的發展に於ては非常なる成功を收めたので、其の後ロシアが中央亞細亞からアフガニスタンに迫つて印度を脅すまでは、世界政策に於て殆んど無人の野を濶步する有樣であつたのであります。卽ち此の間にイギリスは、先づ印度全部を事實上の領土として居ります。一八二六年から一八八六年に至る間にビルマを併合して居ります。印度航路を確實に守るために、一八三九年には紅海の入口のアデンを、一八五七年には同じくペリム島を占領して居ります。一八四二年には阿片戰爭によつて香港を支那から奪ひ、東亞侵略の根城を作つて居ります。

地中海では一八七八年キプロス島をトルコから奪ひ、太平洋上では濠洲全部及びニュージランドを英國國旗の下に置きました。阿弗利加では次第に領土を南部及び西部に擴めました。そして一八七五年には、實に咄嗟の間に僅に四千萬圓を以てエジプトからスエズ運河の株券を買收して居ります。此の運河はフランス人レセップスの不屈不撓の努力によつて出來たもので、イギリスは實に惡辣極まる方法を以て其の仕事を妨害したのでありますが、一旦竣工すると其の實權を自國の手に收めたのであります。そして一八八二年には、エジプトに起れるアラビ・パシャの民族運動による國内不安を口實としてアレキサンドリア港を砲擊し、之を端緒に積極的にエジプト侵略を始め、容易に其の目的を遂げました。而して最後に南阿弗利加のブール人の兩共和國を征服し、玆にイギリス世界帝國の最後の建設を終つたのであります。

それ故に第十九世紀の英國史は、もはや覇權獲得の歴史ではなく、その强化、その確保、その維持の歴史であります。從つて一九一四年の世界大戦に至るまで、

イギリスは一たびも決定的戦爭を行ふ必要がなかつたのであります。併しながらイギリスの傳統的政策そのものは、第十九世紀に於ても何等の變更を見る筈はありません。從前と同じく、苟くも新興國家が嶄然頭角を現はさんとする場合は、イギリスは直ちに容赦なき一擊を之に加へ、又は强硬に之を脅迫して、その野心を放棄せしめずば止まなかつたのであります。クリミア戦爭及び日露戦爭後のロシア、或はファショダ事件以後のフランス、皆な此の政策の俎の上にのせられたのであります。而して近代ドイツの勃興が、歐羅巴の勢力均衡を覆し、やがてはイギリス世界幕府の顚覆者たらんとする惧あるに及んで、イギリスは第四の敵手としてドイツを選び、まづ所謂包圍政策によつて之を孤立に陷れ、次で英獨爭覇戦としての第一次世界大戦となつたのでありますが、此の戦爭に於ても、イギリスは一旦は勝利を得たのであります。

ドイツに打勝てるイギリスは、國際聯盟によつて戦後の世界を釘付けにし、之によつて自己の欲する世界秩序を維持しようと努めました。わけてもボールドキ

ン内閣の外相イーデンは、國際聯盟を强化して謂はゆる『集團保障』の體制を築き上げるために最も熱心に努力したので、此の政策はイーデン外交と呼ばれて居ります。然るに滿洲事變によつて日本が先づ聯盟から脱退しました。次でエチオピア問題が起つた時に、イギリスは國際聯盟規約を利用して經濟的壓迫をイタリーに加へ、大なる期待を以て集團保障の效力を實地に驗して見たのでありますが、御承知の如く慘憺たる失敗に終つたのであります。當時ボールドキン内閣の藏相であつたチャムバレンは此の實情を見て、一九三六年の或る會合に於て『國際聯盟至上主義は、エチオピア問題の經驗によつて最早維持されなくなつた。重大なる國際間の問題を聯盟に託することは、考へ直さねばならぬ』といふ意見を發表して居ります。それでボールドキンの後を受けて自分が内閣の首班になりますと、聯盟至上主義のイーデン外相を犧牲にし、集團保障制の代りに謂はゆる協和政策(アピーズメント)を樹立することによつて、イギリスの安定を圖らうとしたのであります。協和政策とは、歐羅巴の四大國、卽ち英・佛・獨・伊の和解によつて、歐羅巴の平和を

維持せんとしたものであります。此の目的のためにチャムバレンは、あれほど反目して居たムッソリーニに親しく手紙を送り、過去は一切水に流して、地中海に於ける二大國として協調したいといふ希望を述べ、またロンドンデリー侯爵・ロシャン侯爵などをドイツに派遣して、ヒトラーやゲーリングと懇談させて居ります。それでイギリスは、ヒトラーがオーストリアを併合した時でも、また、チェッコ問題の時でも、ドイツに向つて武力を用ゐることを避け、世界に固唾を呑ませたミュンヘン會議も、結局イギリスの讓歩によつて協定が出來たのみならず、協定調印と同時にヒトラーとチャムバレンの兩人が署名して次の如き共同聲明をして居ります。卽ち『英獨兩國が再び相互に相戰ふ意志のないことは、先に兩國間に成立したる海軍協約、及び今玆に調印を了へたミュンヘン議定書で明白である。我々兩人は、英國民もドイツ國民も、兩者間の問題は總て相談によつて解決すべく、これが兩國民共通の意志であることを聲明する』といふのであります。

然るにチャムバレンの協和政策は、ヒトラーが一晩の間にチェッコの殘部を併

呑し去るといふ放れ業を敢てしたので、脆くも失敗に歸しました。此の時以來チャムバレンは、英獨兩國は斷じて兩立出來ぬといふ信念を堅め、玆に對獨決戰の覺悟を決めたのであります。そのために唱へられたのが謂はゆる平和戰線（ピース・フロント）であります。平和戰線といふのは、武力的に極めて强力なる一個の結合を作り、此の强大なる武力結成の前に、侵略國家をして其の野心の實現を斷念させようとする仕組であります。かやうにしてイギリスは先づ自國軍備の强化に全力を注ぎ、イギリスを中心としてドイツよりも遙に强力なる武力群を結成してドイツに臨み、可能ならば戰はずして之を屈し、止むなくば今度こそ一戰を交へる覺悟で進んで來たのであります。一昨年のこと、北洋漁業がイギリスとの間に、鮭罐詰三千萬ケースの賣買契約が出來たといふので、農林省では之も貿易振興政策の結果だと吹聽して居たことを記憶して居りますが、是は取りも直さず英獨戰爭を覺悟しての食糧貯藏に外ならなかつたのであります。事情斯くの如くなるが故に、兩國の戰爭は避く可からざる運命であつたと申さねばなりませぬ。

今日の英人は好んで平和を口にし、自ら平和の愛好者と稱へて居ります。併しながら少くとも過去の英人は、ミルトンが『汝等偉大にして好戰なる國民よ！』と呼べる如く、天國に於て奴隷たるよりは、地獄に於て主人たらんと豪語し來れる好戰敢爲の民であり、且つ其の世界制覇は、執拗無比の戰鬪的精神によつて成就され、現に必死の力を揮つて之を守らうとして居るのであります。而もイギリスが、ドイツと共に日本を敵とするに至つたことは、其の運命の盡きる日が到來したことであります。イギリスの運命盡くることは、世界が解放されること、殊に亞細亞が解放されることであります。以上私はイギリス世界制覇の徑路を述べ終り、明朝より其の東亞侵略の跡を辿らうと存じます。

第二一日

「イギリス帝國主義の權化ともいふべきカーゾン卿は、其の著『ペルシア問題』

の中で、若し英國が一朝印度を失ふならば、斷じて世界帝國の地位を保つことが出來ないと明言して居ります。また、ホーマー・リーといふ極めて特色あるアメリカの一軍人は『アングロ・サクソンの世』と題する著書の中で、『イギリスが印度を喪ふといふことは、英國の領土内に、アングロ・サクソンのあらゆる血と火と鐵とを以てするも、到底破れたる兩端を接ぎ合はせることの出來ぬ一大破綻の發生を意味する』と申して居ります。また、今一人のスナサレフといふ人は、『印度』といふ著書の中で『若し此の不幸蒙昧たる印度のために、自由の勝利を告げる鐘が鳴るならば、その次の瞬間に、歴史の時計は海の女王の死を世界に告げることであらう。そしてイギリスは、僅に本店をロンドンに有する一個の世界銀行となつてしまふであらう』と申して居ります。まことにこれらの人々の申す通りで、若しイギリスが印度を失へば、明日から第三等國となるのであります。印度が英國に取つてそれほど大切な意義を有するのは、單に無限の天産物と無數の人口を擁して居るからではありません。印度は實にイギリス資本の此の上もな

い投資の場處であり、志あるイギリス青年の立身出世の舞臺であり、英國商品の無二の市場であり、莫大なる商業の中心であり、重要なる海上の聯絡點であり、軍隊の駐屯處であり、最も必要なる海軍根據地であります。イギリス人の中には、曾てはシェークスピアを失ふよりは寧ろ印度を失はんと申した人もありましたが、左樣な時代は最早過ぎ去り、今日のイギリスは、百人のシェークスピアを失つても決して印度は失つてならぬと苦心して居るのであります。第十九世紀前半以來、英國外交の根本政策は印度保有の一事に存し、イギリスは第一に如何にしてイギリスより印度に到る海路又は陸路、可能ならば海陸兩路の支配權を確保すべきか、第二に如何にして印度自身を防衛すべきかといふことに、其の全心全力を注いで來たのであります。

併しながら、イギリスは決して、當初から印度の重要性を明かに認識して、印度征服を企てたのではありません。イギリス人が初めて印度を目指して來たのは、簡單明瞭に金儲けのためであつたのであります。印度航路を初めて開いたのは、

ポルトガル人のヴスコ・ダ・ガマでありますから、莫大に利益ある東洋貿易は、殆んど百年の間、ポルトガルの獨占であつたのであります。ポルトガルは第一に、當時歐羅巴の精神的君主たりしローマ法王から、東洋に對する政治的・經濟的・宗教的の絶對優越權を與へられて居たのみならず、若し他國が此の獨占權を脅す場合は、武力を以て之を倒すだけの海軍を有つて居たのであります。然るに、イギリスは、エリザベス女王の時代には、最早カトリック教を棄てて新教に歸依して居たので、ローマ法王に遠慮する必要がなくなつた上に、海軍も次第に強大となつて、一五八八年には、スペイン無敵艦隊を擊滅するまでに至つたのであります。

此のイギリス海軍の基礎を築き上げたのは、ジョン・ホーキンスやフランシス・ドレークの如き、大膽勇敢なる海賊卽ちヒーロー・バッカニーアであります。イギリスの海賊は第十五世紀頃から音に聞こえて居りましたが、第十六世紀になりますと益々盛んになつたのみならず、掠奪の相手はスペインやポルトガルの船で

ありましたから、海賊的行爲は愛國的行爲となり、イギリスの船長は數門の大砲を備へた船に乘つて、東洋貨物を滿載したポルトガル船や、金銀を滿載してアメリカから歸るスペイン船を掠奪することを公然の商賣として居たのであります。世の中に是程儲かる商賣はなかつたのであります。例へば只今申上げたホーキンスはプリマスの舟乘りの悴でありましたが、スペイン領アメリカ領への第一回航海によつて、一躍プリマス第一の富豪となり、第二回航海から歸つて實にイギリス第一の富豪となつたと言はれて居ります。フランシス・ドレークの如きも、一五七七年にイギリスを出帆し、行く先々で强盜を働きながら、世界を一周して一五八〇年にイギリスに歸り着いたのでありますが、其の途々掠奪して來た貨物の價は實に約二億フランに達したと言はれて居ります。エリザベス女王も、ドレークから少からぬ分前を貰つて、大いに喜んで居ります。この話がスペインに傳はると、スペイン王は非常に憤慨してロンドン駐在スペイン公使をして嚴重なる抗議を提出させました。するとエリザベス女王は、スペイン公使をドレークの船の。

甲板に連れて行つて、嚴然としてドレークに向ひ、スペイン人は汝を海賊だと申すぞと叱りつけ、それから甲板の上に彼を跪かせ、悠然とナイトの爵位を賜はる時の接吻を彼に與へて、『いざ起て、サー・フランシスよ』と申したことは、名高い話であります。卽ち女王は海賊である平民フランシスを、サー・フランシスに取立てたのであります。

かやうな次第でイギリス人はスペイン勢力の沒落以前から、ポルトガルの獨占を犯して東洋貿易に參加しようと苦心して來たのでありますが、一五八八年にスペイン無敵艦隊が、ホーキンス、ドレーク等の海賊を中心とせるイギリス艦隊のために擊滅されたので、印度航路上の最大の障礙物がなくなつたのみならず、東洋發展に於て一歩イギリスに先んじたオランダが、スペイン、ポルトガルに代つて東洋貿易の新しき獨占者たらんとする形勢があるので、一群のロンドン商人が結束して、一五九九年の十二月三十一日、資本金僅に六十八萬磅を以て、東印度會社を組織し、エリザベス女王から『喜望峰よりマゼラン海峽に至る國々島々と、

向ふ十五年間自由に且つ獨占的に通商貿易を營むことを得』といふ特許狀を與へられ、翌一六〇〇年――此の年は日本では天下分目の關ヶ原合戰が戰はれた年です、此の年から直ちに活動を開始したのであります。この小さい會社が、後にイギリスのために『王冠に輝く燦たる寶玉』と讃へられる印度を征服し去らうとは、當時は何人も考へなかつたことであります。

さてイギリス東印度會社は、同じく東洋貿易を目的として一六〇二年に創立されたオランダ東印度會社と相並んで、まづ東洋に殘存して居たポルトガル勢力と戰はなければならなかつたのでありますが、一時あれほど多くの英雄を輩出せしめ、あれほど盛大を極めたポルトガルも一旦下り坂になると國力俄に衰へ、到底新興兩商業國卽ちイギリス、オランダの敵でなく、十年ならずして勝敗の數は早くも決してしまつたのであります。而してポルトガル勢力敗退後は、必然新興兩國自身の間に激しき競爭が行はれました。當時一番有利であつた東洋貨物は丁子・ニクヅクなどの香料でありましたが、その主なる產地は香料群島卽ち南洋諸島で

あります。それ故に兩國とも、印度本土を第二にして、まづマレー群島の爭奪に鎬を削り、此の貴重なる香料產地を獨占せんとしました。然るにオランダ東印度會社は、其の資本はイギリスの會社の倍額であり、而も國家の强力なる後援があつたので、此の角逐に於て苦もなくイギリスを壓倒し、南洋諸島の主人公となつたのであります。イギリスは島々から逐はれたので、心ならずも印度本土を活動の舞臺とせねばならなくなつたのでありますが、此の事が他日却つてイギリスの幸ひにならうとは、當時何人も夢想せぬ所であつたらうと思ひます。

イギリスは先づ印度の西海岸に於て、有力なるポルトガル艦隊を擊破して、一六一二年にスラートに商館を置き、印度本土に於ける最初の根據地を置きました。一六二〇年にはペルシア國王と相結んで、ポルトガルの東洋に於ける最も重要なる根據地、ペルシア灣頭のオルムスをペルシアのためにポルトガルから奪回し、その報償としてオルムスに城塞を築くことを許され、また此の同じ年に、コロマンデル海岸のマドラスを土人君主から買收し、玆にも城塞を築いて、印度東海岸

に最初の根據地を置きました。其の後一六六八年に、イギリス國王チャールス二世から、一年僅に十磅の地代で、東印度會社は、ボムベイを借受けたのであります。ボムベイは此の時より約八十年以前にポルトガル人が開いた印度第一の良港であります。一六六一年ポルトガル王女がチャールス二世の妃となつた時、ポルトガル國王が王女の化粧料として之をイギリス國王に贈つたもので、ポルトガル王は當時のゴア總督が『英人がボムベイに腰を据ゑる其の日に、ポルトガルは印度を失ふであらう』と切諫したのも聽かず、遂に之をイギリス王に進上したのであります。然るに國王は、色々な事情から其の維持に困り、之を會社に貸下げたのであります。爾來ボムベイは次第に榮え、一六八七年以後はスラートに代つて印度西海岸に於ける英國貿易の中心となり、以て今日に及んで居ります。また一六九〇年には、ベンガルのフーグリ河畔に、今日のカルカッタとなるべき基礎も置かれ、其の他にも印度の東西兩海岸に幾多の貿易據點が置かれました。一六六〇年より一六九〇年に至る三十年間は、東印度會社の黃金時代で、毎年の平均配

當率は二割五分强に達して居ります。

マコーレーは其の流麗なる筆を揮つて、當時の事情を斯う書いて居ります――

『會社はチャールス二世の大部分の間、此の印度館で莫大の富を得た。商業史は、かくの如き巨萬の富が堂々と流れ込んだ例を他に見出さず、ロンドン市民は、驚きと貪欲と嫉妬に充ちた憎惡に興奮して居た。富と豪奢とは急激に增加した。東洋產の香料・織物・寶石などに對する嗜好が日增に强烈になつた。モンク將軍がスコットランド兵をロンドンに送つた頃は、茶は支那の非常なる珍品として持囃され、極めて少量を脣で甜めて珍重されたものであるが、八年後には之が規則的に輸入され、間もなく大藏省が好ましき課稅の對象の一としたほど多量に消費され始めた。王政復古以前、イギリスの船舶は、未だ一隻もテームス河畔からガンジス河のデルタを訪れたことは無かつた。然るに王政復古に續く僅々二十三年間に、此の富裕にして人口多き印度からの輸入年額は、八千磅から三萬磅に增大した。かくの如く急激に膨脹せる貿易を、一手に獨占して居た其の頃の東印度會社

の利益は、殆んど眞實と思はれないほど莫大であつた。この印度貿易による莫大なる利益が、若し多數の株主の間に分配されて居たならば、何の不平も起らなかつたかも知れない。然るに實際は、株券の値段が上ると同時に、株主の數は漸次減少して行つた。會社の富が最高度に達した時、その經營は極めて少數の富豪の手に握られた。』

かやうに東印度會社は最も有利なる東洋貿易を獨占し、而も其の無限の利益は極めて少數なる大株主の壟斷するところとなつたのでありますから、イギリスの輿論は次第に沸騰し、會社の特權を取消せといふ聲が當然高まつて來ました。東印度會社は、此の攻擊に對して、莫大なる黃金を以て戰つて居ります。之もマコーレーの言葉を藉りて申せば『宮廷に於て會社のためになりさうな者、又は害になりさうな總ての者、卽ち大臣、女官、僧侶の果に至るまで、カシュミア・ショール、絹織物、薔薇香水、ダイヤモンド、金貨の袋が贈られた。此の思ひ切つた贈賄は、間もなく豐かな利益をのせて歸つて來た。』豐かな利益といふのは、國

王を初め、政府の高官や會社攻擊者に莫大の賄賂を贈つたお蔭で、輿論の激しき反對に拘らず、ステュアート家の王樣たち、卽ちチャールス二世・ジェームス二世から特許狀を更新して貰ひ、獨占期限を延ばすことを得たといふ意味であります。此の賄賂の好きなチャールス二世とジェームス二世は兄弟でありましたが、其の頃のイギリス人は『兄チャールスは物を理解しようと思へば理解することが出來る、但し弟ジェームスの方は理解することが出來ても理解するを欲しない』と取沙汰して居たのでありますが、そのジェームス二世が遂に民心を失ひ、一六八八年の所謂名譽革命によつてステュアート家が沒落することになつたので、東印度會社は玆に有力なる味方を失ひ、イギリスの議會と直接對峙せねばならなくなつたのであります。

是に於て東印度會社の反對者はホキッグ黨と提携して會社を倒すに決し、先づ議會をして東印度會社に加へられる數々の非難に就いて調査會を開かせることに致しましたが、調査の結果、會社は新しい特許狀を得るために、政府や攻擊者に

八十萬磅の賄賂を贈つたこと、一六八八年から一六九四年に至る六年間に百七萬磅の大金が不當に費消されて居ることが暴露され、一六九五年には多數の重役が獄に投ぜられて居ります。かかる次第で會社に對する非難は段々と高まり、一六九七年には印度絹の輸入によつて大打擊を蒙つたロンドン絹織業者が、先登に立つて會社攻擊を初め、市民は彼等の宣傳に激して市中諸處に集合し、東印度會社の建物を襲擊し、その貨物を掠奪せんと騷ぐまでになりました。會社は日々激しくなる攻擊に對する策戰として、當時政府がフランスとの戰爭のために財政困難に陷つて居たのに乘じ、印度貿易獨占權確保を條件とし、四分利で七十萬磅の國債に應ずることを提議しました。すると會社の反對者はホキッグ黨と相結び、三分利にて二百萬磅の國債に應じ、之によつて印度の貿易獨占權を奪はうと努め、結局一六九八年に議會は此等の人々に新しき印度會社の設立を許可したのであります。そこで印度貿易のために二つの會社が出來て、激しい競爭を始めたので、英國王室及び議會は、かかる狀態を放置して居ては、結局競爭國の乘ずる所とな

ることを悟り、一七〇二年遂に兩會社に合同を命ずるに至りました。尤も合同後にも内部に新舊兩派の對立が續きましたが、一七〇八年にゴルドフィン伯爵の調停によつて、初めて兩派の十分なる和解を見、名實共に一個の會社として活動することになつたのであります。東印度會社の印度に於ける眞箇の活躍は、實に此の時から始まるのであります。

第三日

イギリス人が純然たる金儲けのために初めて印度に渡つて來たころは、印度ではモーガル帝國の盛んな時でありました。此の帝國はモーガル卽ち蒙古人の帝國と呼ばれて居りますけれど、其の建國者バーバルは英雄タメルランの血を引いたトルコ人であります。もとは中央亞細亞の小國の君主にすぎなかつたのでありますが、先づアフガニスタンを征服し次で印度に攻め入り、一五二六年には北印度

全部を統一してモーガル帝國の礎を置いたのであります。彼は限りなき興味と教訓とに滿ちたる自敍傳を書殘して居りますが、實に驚くべき天才で、歐羅巴の歴史家でさへも『古今東西の歴史に於て、バーバル皇帝よりも聰明で、魅力に富み、また好愛すべき君主は殆んどない』と言つて居ります。其の孫のアクバル大帝は、殆んどイギリスのエリザベス女王と時を同じうし、五十年の長きに亙りて印度に君臨し、之に國家的統一と組織とを與へて居ります。アクバル大帝以前のトルコ人又は蒙古人の印度支配は、要するに一種の軍事的占領にすぎなかつたのでありますが、アクバルは之を强大なる帝國として其の子ジャハーンギールに傳へ、ジャハーンギールに次いでアウラングゼブが帝位を繼いだのであります。ジャハーンギールの卽位は一六〇五年で、アウラングゼブが死んだのは一七〇七年でありますから、私が昨日述べたイギリス東印度會社の前半期の活動は、取りも直さず此の二人の皇帝がモーガル帝國に君臨して居た時代であります。イギリスの東洋進出は、その初めに於ては征服のために非ず、占領のために非ず、專ら貿易のた

めであつたことは、屢〻繰返した通りでありますが、東印度會社が印度と商賣を始めたころは、丁度モーガル帝國の盛時に當り、少くとも北印度は政治的に統一され、平和の間に商賣を營むのに好都合の時代でありましたので、東印度會社は印度で戰爭をしようなどとは夢にも想つて居なかつたのであります。然るにアウラングゼブ皇帝の治世後半から帝國の礎とみに搖ぎ、是まで從順であつた諸藩王國が次第にデーリ政府の統制に服さなくなつたのであります。ヂンセント・スミスは、アウラングゼブの人となりを說明して斯う書いて居ります——『彼は高邁なる知力の人であり、其の文章が示す如く燦然たる文筆の人であり、巧妙なる外交家であり、恐怖を知らぬ勇士であり、公平仁慈なる裁判官であり、練達なる行政家であり、其の日常生活に於ては最も嚴肅敬虔なる修道士であつたが、それにも拘らず其の政治は遂に失敗であつた。』そして其の失敗の最大原因は回教徒としての彼の信仰が、餘りに熱烈であつたからであります。彼以前のモーガル君主は、宗教に對して極めて寛大でありましたが、アウラングゼブは其の寛容政策を

一擲して、回教を弘めるために、從つて異教徒を亡ぼすために、一切の非難、一切の抵抗、一切の政治的不利益を無視して全力を注ぎ、そのためにモーガル帝國の最も勇敢なる護衛であつたラージプト人を離反させ、南印度に於けるマラータ人の魂に民族的憎惡の炎を燃え立たせたので、帝國の秩序は俄に紊れ初め、民は塗炭の苦を嘗めるやうになつたのであります。此の混沌はアウラングゼブの死後、急速に激成されて行きました。そこで印度會社は今までのやうに平和の間に商賣が出來なくなり、貿易を支持するために兵力を用ゐるに決し、一六八六年に最初の印度遠征軍派遣を見ましたが、此の時はアウラングゼブ皇帝時代のことと て、遠征軍は散々な目に遭ひ、一六九〇年、モーガル皇帝に十七萬磅の償金を出し、其の上『將來かくの如き恥づべき行爲を繰返さぬ』といふ約束の下に再び通商を許されたのであります。

此のイギリスの印度遠征軍は十二門乃至十七門の大砲を具へた軍艦十隻、歩兵六百から成れる小規模のものでありましたが、その目的だけは恐ろしく大規模で

あつたのであります。卽ち印度の西海岸では、土民の船艦を捕獲してモーガル帝國に宣戰する、東海岸では海上に於ける一切のモーガル船艦を拿捕し、ベンガル灣の北東隅にあるチッタゴンを占領し、ガンジス河を溯つてベンガル國の首府ダッカに至り、藩王との間に武力を以て强制して條約を結ぶといふのであります。之はイギリスと印度とが如何に遠距離であるか、印度の勢力は如何ほどのものであるかに就いて全く無智であつたから立てられた笑ふべき計畫であります。當時のモーガル帝國は、衰へたりとは言へ尙ほ十萬の大軍を擁し、ベンガル藩王でさへも直ちに四萬の兵を動員し得たのでありますから、六百や千人のイギリス兵では、齒の立ちやうがなかつたのであります。唯だ此の時印度に於けるイギリスの沒落を救つたのは、その有力なる海上權で、英國軍艦が西海岸の一切の船舶を捕獲した上、艦隊を紅海及びペルシア灣に出動させて、印度とメッカの間を往復する回敎徒の巡禮船を捕獲させたので、モーガル皇帝も漸く和意を生じたのであります。

是より先き、フランスもまた諸國に遲れて印度に進出して居ります。種々の失敗を重ねた後、フランスでも印度會社と呼ぶ大きい團體が、ルヰ十四世の保護の下に一六六四年に形成され、一六七四年に印度東海岸のポンディシェリ、一六八八年にはカルカッタ附近のチャンデルナガールに根據地を築き、其の他東及び西海岸の諸處に商館を置いて活動を初めました。そして印度の政治的混沌に乘じ、互に反目せる諸藩王を爭はせて漁夫の利を占めながら、次第に勢力を扶植して行つたので、勢ひイギリスとの衝突を免れぬこととなりました。かかる間に歐羅巴では、スペイン王位相續を導因として英佛兩國が相戰ふことになつたので、一七四四年以來、戰爭は惹いて印度にも及び、玆に印度は明白に英佛兩國民の植民的覇權爭奪の舞臺となり、此の世紀の初めより次第に政治的性質を帶びて來たイギリス東印度會社は、今や著しく其の色彩を濃くするに至つたのであります。

印度に於ける英佛兩國の角逐は多年に亙り、互に勝敗あつたのでありますが、初めの間は勇敢大膽なるフランスの指揮者デュプレークス及びラ・ブールドネ等

の武斷政策が、着々效を奏して、イギリスの地位は次第に不利となり、一七五三年にはイギリス東印度會社より本國政府に干渉を請うて、其の結果一時休戰を見るに至りました。而して一七五六年には、イギリス勢力の衰へに乘じ、豫ねて英人の無遠慮なる進出を憎んで居たベンガル藩王スラージャ・ウッダウラがカルカッタを襲擊し、百四十六人のイギリス人を小さい部屋に閉ぢ籠めて、遂に悉く之を窒息させた所謂ブラック・ホールの悲劇があり、イギリスの形勢日に非ならんとしたのであります。

かくの如き時に當り、形勢を一變してイギリスの地位を回復したのは、實にクライヴの機略と勇氣とであります。イギリスはスラージャ・ウッダウラの襲擊に對抗するため、ワトソン提督に二千四百の兵を與へ、マドラスからベンガルに艦隊を派遣したのでありましたが、此の遠征隊の中に當年三十二歳の陸軍中佐ロバート・クライヴが加はつて居たのであります。東印度會社の重役達は、艦隊派遣はもともとベンガル藩王の膺懲が目的でなく、會社が營業を始められる狀態に復

歸すればそれで滿足なのでありますから、藩王から和平を申入れると、直ぐさま之に應じて停戰狀態に入つたのであります。然るに藩王は故意に交渉を長びかせ、其の間にいろいろな權謀術策を用ゐて有利に問題を解決しようとしましたので、クライヴの方でも敗けず劣らず陰謀をめぐらしました。彼は其の放つた間諜によつて、藩王の周圍には、機會あらば自ら取つて代らんとする謀叛を企んで居る者があり、その中で最も有力なのは藩王の總軍司令官ミル・ジャファールであることを知り、一方藩王と和平交渉を續けながら、他方此のミル・ジャファールを籠絡して、彼を助けてベンガル藩王とする計畫を進めて往きました。そして準備が出來ると、藩王に向つて英國の勘忍袋の緒は最早切れたから、諸種の懸案を卽刻解決したいと申込んだのであります。藩王はクライヴの言葉の意味を直覺し、彼の挑戰に應ずるため急ぎ軍隊を集結し、歩兵五萬、騎兵一萬四千、大砲五十門を具へた上、フランスからの援軍を得て、イギリスとの一戰を覺悟しました。此の時クライヴの兵は僅に二千四百でありましたが、彼はミル・ジャファールと打合

せ、適當な時機に藩王に叛いて部下と共にイギリス軍に投降させる手筈を整へ、安心して行軍を開始したのであります。

いまや兩軍はプラッシーの野に對陣し、戰火を開くばかりになりましたが、ミル・ジャファールは約束に背いて定められた時刻に行動を起さなかつたのであります。そこでイギリスは二千四百の寡兵で六萬五千の大敵と雌雄を決せねばならぬこととなつたので、イギリス側の軍事會議は甚だしく絶望的な空氣に包まれ、皆な激しくクライヴを非難して、如何なることがあつても此の無謀なる會戰は避けねばならぬと主張したのであります。クライヴは默々として彼等の喧々囂々たる議論を聞いて居ましたが、やがてすつくと立上がり、『一時間後に何を爲すかを言うてやる』と言つたまま、大木の下に往つて横臥して居ました。而して正一時間の後に『戰爭だ！　明日卽ち一七五七年七月二十二日、我等は印度軍に向つて進擊する』と命令したのであります。そして灼けつく熱さの中を行軍して、印度軍を距る一哩の森の中に其の日は野營を張り、翌日黎明から激しい會戰を始め

たのでありますが、必死の英軍の前にベンガル軍は次第に旗色惡くなり、遂に應戰の手を弛めて退却に移り出した時、初めてミル・ジャファールが動き出し、茲に勝敗は忽ち決し、藩王は都を棄てて亡命したのであります。クライヴはミル・ジャファールの臆病な行爲などは素知らぬ顏をして彼をベンガル藩王の位に卽かせ、立どころに銀貨で八十萬磅の賠償金を英國側に支拂はせた上、自分自身も三十萬磅に相當する金銀寶玉を此の新しきベンガル王からせしめて引上げたのであります。すると前藩王の一族の一人が、ミル・ジャファール征伐の軍を起してデーリから進擊して來たので、クライヴは軍を回して敵軍を走らせ、ミル・ジャファールの危險を救つた報酬として三十萬磅の年金を終身彼に與へる約束をさせました。

然るに此の時、イギリスと角逐して居たオランダがカルカッタ占領を企てて、軍艦七隻に一萬五千の大兵をのせフーグリ河口に押寄せたのであります。ミル・ジャファールはクライヴが煙くもあるし三十萬磅の金も支拂ひたくないので、密

にオランダ人を煽動して、ベンガルに於けるイギリス人の根據を覆へさうとしたのでありますが、此の時もクライヴは機先を制してオランダ艦隊を襲擊し、遂に之を降したのであります。此の時の戰に、一彈來つてクライヴの帽子を貫きましたが、クライヴは帽子を脫いで彈痕を見ながら冷然として『この帽子はまだ役に立つ』と言ひ、再び之を頭にのせ、劍を拔いて敵艦隊の中に小舟を乘込ませたことは有名な話であります。戰終つてクライヴはミル・ジャファールに會ひましたが、オランダとのことなどは口にも出さず、丁寧に外交辭令を取交はして引上げたのであります。それはミル・ジャファールが最早完全に英國の手中に落ちたのでありますから、辯明を求めることも之を叱責する必要も無くなつたからであります。實にクライヴの外交術策と武力行動とが一擧にして印度の東北一帶をイギリスの勢力範圍とし、會社の中心をマドラスからカルカッタに移させることになつたのであります。而して一七六五年には、當時の一中佐クライヴがベンガル總督兼軍司令官として印度に來り、在職一年半の間にベンガル、オリッサ、ビハー

ル三國――實にフランスよりも大きい地域を事實上イギリスの領土としたのであります。然るに會社の印度統治は、土民に對して甚だしく苛酷無理解であつたので、到る處土民の反抗を激成し、諸處に叛亂の勃發を見るに至りましたが、イギリスは其の都度之を鎭壓して領土を擴めて行きました。但し連年の戰爭のために莫大なる戰費を必要としたので、たとへ貿易で儲けたとは言へ、會社の財政は次第に困難に陷り、其の上會社の印度政策が議會に於て激しく非難の的となつたので、キリヤム・ピットの內閣に於て、東印度會社を全然本國政府の監督下に置く所謂ピットの印度法が制定され、印度事務の最高管理は會社の手を離れ、最初貿易を目的として始められた仕事が、今や貿易と關係なき人々の管理に歸し、會社は全く政治的性質を帶びるに至りました。これは一七八四年のことであります。かく政府と會社とが相並んで印度に臨んだ時代を『二重統治』の時代と申しますが、イギリスが印度に對する積極的侵略を斷行したのは此の時代のことで、一七九八年ウェルズリが印度總督になつた時から始まり、次でヘスティングスが之を

遂行し、最後にダルハウジ總督によつて狂熱的に行はれたのであります。

一八五七年、此の年は井伊掃部頭が大老となつた年でありますが、此の年六月二十三日、ロンドンではプラッシー會戰一百年記念祭が行はれ、人々が荐りにクライヴの勳功を讃へて居た其の時に、イギリスの壓迫に堪へ兼ねた印度土人軍隊が、起つて叛亂を起しました。此の未曾有の凶報が數日後ロンドンに達した時の朝野の驚きは大變であつたのです。叛亂は殆んどガンジス河の全流域に波及し、英國のインド支配は覆へされるかに見えましたが、東印度會社から年金を受けて居た印度の王侯貴族が之に加はらず、其の他の上層階級もまた立上がらなかつたので、半年の後に徹底的に鎮壓されてしまひました。但し此の動亂は二重統治の不備を遺憾なく暴露したので、翌一八五八年の『印度統治法』により、印度統治の大權は全くイギリス國王の手に移り、一八七三年東印度會社は解散し、次で一八七六年イギリス女王ヴクトリアが印度皇帝の位に卽き、玆に印度帝國の建設を終つたのであります。

第四日

英國の印度征服史上に、クライヴと相並んで其の名を謳はれるウォレン・ヘスティングスは、もと東印度會社の一書記で、一七七一年三十九歳でベンガル知事となり、一七八五年には印度總督となつて、昨日申上げた二重統治時代に、最も辣腕を揮つた人物でありますが、私は彼が如何に殘酷なる手段によつて印度を虐げたかに就て、二三の例を紹介したいと存じます。私はイギリスを憎む印度人やドイツ人の書物によつてではなく、イギリス自身の歴史家の著書に據つて申上げるのでありますから、何等の誇張もないといふことを承知して頂きます。その歴史家とは既に引用したマコーレーであります。マコーレーは假令偉大なる歴史家でないとしても、少くとも偉大なる歴史文學者であり、其の上一八三四年に印度最高會議の法律顧問となり、四年間印度で勤務して、ヘスティングスの行動を現

地で見聞した人であります。

さて此の二重統治時代に於て、イギリス本國は印度總督に如何なる命令を與へて居たかと申しますと、『統治は正義と溫情を旨とせよ。但し金を送れ、もつと送れ、もつともつと送れ』といふことであつたのです。從つてヘスティングスも絶えず同樣の命令に接したのでありますが。これは實際に於ては全く矛盾した註文で、マコーレーが言へる如く『汝は同時に印度人の父となり、また腐敗に導く誘惑者となれ、汝は正義であると同時に非道であれ』といふのと同じ事であります。ヘスティングスも印度人の慈父になりたかつたかも知れませぬが、ロンドンから金だ金だと激しく催促して來るので、之にも應じなければなりませぬ。此のロンドンからの催促を滿足させるために彼が取つた方法の一つは、ウードの一藩王スジャー・ウッダウラに向ひ『イギリスの軍隊を貸すから隣接ロヒラ人の國ロヒカンドを占領せよ、其の代償として四十萬磅を提供せよ』とそそのかし、遂にスジャー・ウッダウラをして、何等の理由もないのにロヒカンドに攻入らせたことで

あります。此の事に就てマコーレーは下の如く書いて居ります——『ロヒラ戰爭の目的は、他國人に對して毛頭侮辱を加へた事のない善良な人々から、其の善き政治を奪ひ、其の意志に背いて厭ふべき虐政を押付けるといふことであつた。……ロヒラ人は平和を望んで哀訴嘆願し、巨額の金を積んで只管戰爭を避けようとしたが、總ては無效であつた。彼等には徹底的抗戰の外に如何なる方法もなかつた。血腥い戰爭がかくして起つた。印度に於て最も善良で最も立派であつた國民は、貪欲・無知・殘虐無類なる暴君の手に委ねられ、スジャー・ウッダウラの貪欲をそそつたあれほど豐かな此の國は、今や慘めな國の中でも最も貧乏な地方と成下つた。』

このロヒラ戰爭は本國でも囂々たる非難の的となり、政府はヘスティングスに向つて顧問會議を開くやう命令しました。然るに顧問會議の議員は過半彼の敵であつたのに加へて、當時印度人が非常に尊敬して居た名高きバラモン僧ナンダクマールが『ヘスティングスは官職を賣り、且つ罪人から收賄して之を無罪放免し

た』といふ告訴狀を此の顧問會議に提出したのであります。ヘスティングスは形勢の不利なるを見て、まづナンダクマールが、六年前に他人の筆蹟を僞造したといふ廉で之を告訴し、カルカッタ最高法院の裁判長でヘスティングスの親友なるイムビーが、之に死刑の宣告を下したのであります。マコーレーは此の時の死刑の實狀を下の如く傳へて居ります。――

『翌日未明に、絞首臺の周圍に無數の人々が集まつて來た。總てが苦惱と恐怖の表情を浮べて居た。彼等は最後の瞬間まで、如何にイギリス人でも此の偉大なる婆羅門僧を殺すのでなからう、殺しはしまいと信じたかつたのである。遂に悲壯な行列が群衆の中を進んで來た。ナンダクマールは輿の中に端坐し、擾されぬ心の平靜を示す眼差しであたりを見廻した。それは近親の者への告別である。近親者の泪と、思ひ惑へるやうに見える其の振舞は、流石の歐羅巴人の顏色を蒼ざめさせた。此の告別は囚人の水の如き冷靜と對比して、强い印象を與へた。會議の友人たちに宜しくと言殘して、彼はしつかりした足取で刑臺に上り、絞首臺に

向つて合圖した。搖れたる彼の身體を見た無數の人々は、一齊に大きな叫喚を上げた。人々は此の慘ましき有樣を見て、泣き叫び乍らフーグリ河指して走り行き、其の河水に浴して穢れを潔めようとした。』實に憐れな話であります。

いま一つの例は、ヘスティングスが之また金を絞り取るためにウード國の一女王に加へた暴虐であります。彼は英國兵の一隊を派遣して王宮の門を占領し、女王を捉へて一室に幽閉したが、それでも財寶を提供することを肯んじなかつたので、女王に忠實であり女王が最も親愛して居た二人の老人を捕へ、之を檻の內に投げ込み、死なんばかりに飢ゑさせた上、弱り切つた兩人をルクノーに護送して拷問にかけたのであります。かうして女王の心を痛ましめようといふのであります。玆でまたマコーレーの言葉を引用致します――

『ルクノーで野蠻なる行爲が行はれて居る一方、女王は益々嚴重に禁錮された。食物の差入はほんの一口か二口にすぎないから、二人の腰元は飢ゑて死んだ。あらゆる脅迫を行ひ盡し、もはや如何なる手段も種切れとなつた後、漸く總督は彼

女から百二十萬磅を絞り上げた。ルクノーの二老人も初めて釋放された。』

而もかくの如き行爲は、決してヘスティングスのみのことでなく、彼の後を承いで總督となつたダルハウジも同樣であつたのであります。ダルハウジに就ては同じくイギリスの名高き歴史家シーレーが、如何に『横暴を極めた方法』で侵略を行つたか、『到底是認し難き數々の行爲を敢てしたか』を物語つて居ります。

印度とイギリスとは波濤萬里を隔てて居ります。印度の民衆は爾く多數であります。從つてイギリスの印度征服は不可能とも考へられます。實際若しイギリスが武力だけで印度を征服しようとしたならば、恐らく不可能であつたらうと思はれます。併し乍らイギリスは、決して武力にのみ頼つてインドを征服したのでありません。辛辣なる權謀術策を用ゐて、印度を其の單純なる人民から奪ひ取つたものであります。イギリスは、印度教徒と回教徒とを反目させ、藩王と藩王とを敵對させ、ジャット人とラージプト人を戰はしめ、其のジャット人・ラージプト人とマラーター人とを戰はしめ、ブンデラ人とロヒラ人とを爭はしめたのであり

ます。英人はあらゆる苦肉の策を以て彼等を離間することに成功し、彼等が無益の爭鬪に疲れ果てるに及んで、專ら漁夫の利を占めて來たのであります。イギリスは又條約を藩王と結んでは勝手に之を破棄し、故らに藩王を酒と女に溺れさせ、苛斂誅求を行はねば財政が立ち行かぬやうに仕向けて、人民と反目させました。さうして一歩一歩英國勢力を印度に確立して行つたのであります。その一々を詳しく説明する餘裕はありませぬが、度々引用したマコーレーの『クライヴ論』及び『ヘスティングス論』、ジェームス・ミルの『英領印度史』、トレンの『亞細亞に於ける我が帝國』、ベルの『バンジャブ併合史』などを御覽になれば、私の言葉が決して誇張でないことを御認めになることと存じます。而していま擧げた書物は、悉く英國人自身の著書であります。

さてモーガル帝國廢頽以後の印度諸藩王の政治は固より善政でありませんでしたが、それでも尙ほ東印度會社の統治より優つて居たことは、ジェームス・ミルの『英領印度史』が正直に之を認めて居ります。この英人の虐政に對する抑へ難

き忿懣が、一八五七年の印度兵叛亂でありますが、此の叛亂中、並に叛亂鎮定後に於けるイギリス人の殘忍酷薄は、世間の人が多く知らない處で、而も彼等の印度に對する態度を最も赤裸々に暴露せるものでありますから、二三の例を之もイギリス人の著書のうちから紹介して置きます。第一はケー・A・マレソンの『印度叛亂史』第二卷の一節であります。

『戒嚴令は布かれた。五月及び六月の立法會議によつて制定された恐怖すべき條例が盛んに適用された。文官武官が等しく血腥き巡回裁判を開き、或は巡回裁判なしに土民の老幼男女を屠つた。既にして血に渴ける慾は更に强くなつた。曾に叛亂に荷擔せるもののみならず、老人・女子・小兒なども血祭に上げられた。此の事は印度總督が本國に送れる書類の中の、英國議會の記錄に收められて居る。彼等は絞刑には處せられず、村々に於て燒殺され、又は銃殺された。英人は臆面もなく此等の殘忍を誇つて、或は一人の生者を餘さずと言ひ、或は黑ん坊どもを片端から殴り飛ばすのは實に面白い遊戯だと言ひ、或は實に面白かつたと言ひ又

は書いて居る。權威ある學者の承認せる一著書には、三箇月の間、八輛の車が、十字街又は市場で殺された屍骸を運び去るため、朝から晩まで往來したとあり、また斯くして六千の生靈が屠られたとある。』

『我軍の將校は既に各種の罪人を捕へ、恰も獸を屠るが如く之を絞刑に處して居た。絞首臺は列をなして建てられ、老者・壯者は言語に絶する殘酷なる方法を以て絞首された。或る時の如きは、兒童等が無邪氣に叛兵の用ゐし旗を押立て、太鼓を打ちながら遊んで居るのを捕へて、悉く之に死刑の宣告を與へた。裁判官の一人なりし將校は、之を見て長官の許に赴き、流涕して此等の罪なき兒童に加へられたる極刑を輕減せられんことを嘆願したが、遂に聽かれなかつた。』

次はベルの『印度叛亂』第一卷の中の一節であります——

『予は面白い旅をした。我等は一門の大砲をのせたる汽船に乘込み、左右兩岸に發砲しつつ航行した。叛亂のあつた處に着くと、船から上陸して盛んに小銃を發射した。予の二連銃は忽ち數人の黑ん坊を殺した。予は實に復仇に渴して居た。

我等は右に左に小銃を發射した。天に向つて發射せる銃火は、微風に搖られて叛逆者の上に復仇の日が來たことを示した。毎日我等は騷動の起つた村々を破壞し燒打ちするために出て歩いた。予は政府並に英人に抵抗する一切の土民を裁判する委員の主席に推された。日々我等は八人乃至十人を屠つた。生殺の權は我等の掌中に在つた。そして自分は此の權利を行ふに些かの容赦もなかつたことを斷言する。死刑を宣言された犯人は、頸に繩を卷いて、大木の下に置かれた馬車の上に立たされ、馬車が動けば犯人は吊り下つて息絶えるのである。』

印度はかくの如くにして英國のものとなつたのであります。然らば印度の統治が東印度會社の手を離れ、二重統治時代を去つて、全く英國政府の手に移つた後に、印度は果して幸福であつたか。斷じて否であります。先づイギリスは、數々の法律條例によつて、印度在來の農業制度を根柢から破壞し去りました。そのために印度社會の經濟的障壁であつた村落共同體は亡び去り、農村はイギリス資本の支配の諸條件に都合よいやうに改革されましたので、印度農村は目も當てられ

ぬ悲慘な狀態に陷りました。ハーバート・コムプトンは『予は誓つて言ふ、大英帝國に於て、インド農民以上に悲慘なるものはない。彼は一切を絞り取られて唯だ骨のみを殘して居る』と言つて居ります。彼等の多くは、腹一杯物を食つた經驗なくして死ぬのであります。常に精根を使ひ盡して居るので病に罹れば直ぐ斃れます。衣服は殆んど纏はず、子供に至つては全く裸であります。家には明りがなく、日暮れて月なき夜には、彼等は悄然として闇黑の裡に踞つて居るのであります。一九二八年と言へば今から十年前です。此の年にベンガル州の衞生長官は下のやうに報告して居ります――『ベンガル農村の大部分は、鼠でも一月とは生きて行かれさうもない物を常食として居る。彼等の生活は、不當なる食物のために非常に惡化して居るので、惡疫の傳播を防ぐよしもない。昨年はコレラで十二萬人、マラリヤで二十五萬人、肺結核で三十五萬人、腸チフスで十萬人死んだ』と。印度の手工業も、また壞滅しました。第十八世紀末から第十九世紀初めにかけて、イギリスは產業革命の時代でありますが、此の革命は印度で搾取した黃金

の力で一層早められたのであります。昔から世界最大の棉製品生産國であつた印度に、イギリス製の棉糸棉布が氾濫するやうになつて、極めて多數の印度人は路頭に迷つてしまひました。

アメリカの國務長官であつたブライヤンは、音に聞えた雄辯家として、我國にも普く知られた政治家であります。此の人が曾てロンドンで發行される『印度』といふ週刊新聞に、『印度に於ける英國の統治』と題する一文を發表したことがあります。ブライヤンは此の論文の冒頭に『正義とは何ぞ、此の疑問は予の印度旅行中、不斷に予の耳に響いて居た。予が未だ法律學生たりしころ、予はウォレン・ヘスティングスの審問に於けるシェリダンの演說を讀んだ。其の後十六年にしてアメリカがマニラを取り、盛んに植民政策が論議されるやうになると、予は印度に於ける英國の統治を知らんとして、端なくもシェリダンの彈劾演說を想ひ出した。予は是を讀めば讀むほど英國の不正なるを思つた。然るにアメリカ人の多數は、年來英國の植民政策を賞讃して居るので、予は我國にとりて極めて重大

なる問題を、眞劍に研究する機會を與へられるだらうと思つて、大なる期待を以て印度視察の途に上つた。予は高級下級の英國官吏、印度敎・回敎・波斯敎の敎養ある人士と會談し、貧者、富者、都會の人、農村の人を視察し、統計・報告・演說筆記など、アメリカで手に入れられぬ文書を集めて調査した。そして印度に於ける英國統治は、予の想像したるよりも遙に惡く、遙に苛酷に、遙に不正なるを知つた』と申して居ります。次で彼は印度視察中に知り得たる數々の不正を指摘したる後、下の言を以て其の文を結んで居ります――『何人も植民政策を辯護するために印度を引照する勿れ。助けなき人民の上に無責任なる權力を揮ふに當りて、智慧と正義とを以てすることの如何に人間として不可能事なるかを、イギリス人はガンジス河・インダス河の流域に於て立證して居る。英人は或る利益を印度に與へたが、之に對して無法なる代價を强奪した。生きたる者に平和を賣すと稱へながら、幾千萬の生靈を死者の平和に誘つた。爭鬪に苦しむ民衆に秩序を與へると稱へながら、合法的掠奪によつて國土を極度の貧困に陷れた。掠奪とい

ふは過言かも知れない。但し如何に言葉を飾るとも、現在の不當なる政治を淨めることは出來ない。』

是が實にイギリスの印度統治であります。

第五日

今日は英國の支那進出について申上げます。支那の數々の物產のうち、夙くから西洋で珍重されたのは、絹布及び茶であります。此の高價なる品物は、印度航路のまだ開かれぬ前から、陸路中央亞細亞を經て歐羅巴に供給されて居たのであります。そして最初に海路によつて此の有利なる貿易を獨占したのはポルトガルでありましたが、第十七世紀の初め、チャールス一世の時に至り、英國商人の一團が、支那貿易に參加すべく、國王から特許狀を與へられ、艦長ウェッデルが此の目的のために一小艦隊を率ゐて支那に向ひ、一六三五年マカオに到着しました。

即ち我國では三代將軍德川家光の時に當ります。ポルトガルは此の新しき競爭者の出現を憤り、一切の迫害を加へて其のマカオに據ることを妨げたので、ウェッデルは此の地を去つて廣東に進まうとしました。然るに艦隊が廣東河口の虎門砲臺に差しかかると、突然支那兵が砲擊を加へたので、ウェッデルは直ちに之に應戰し、遂に砲臺を占領してイギリス國旗を揭げました。その結果、支那はイギリスに通商を許し、交易の場處を廣東城外に定めました。爾來、英國と支那との貿易は專ら廣東を通じて行はれ、やがてイギリス人は支那貿易に於て他の歐羅巴諸國を凌ぎ、少くとも他國商人の取扱ふ荷物でも、船は主としてイギリス船で運ばれ、ロンドンが支那商品の歐羅巴市場となりました。

さて初めに述べたやうに、イギリス人が廣東から積出す主要商品は、主として絹布と茶でありましたが、之に對して莫大の現銀を拂はなければならなかつたのであります。支那は當時自給自足の國でありましたから、殆んど歐羅巴貨物を必要とせず、唯だ銀だけが欲しかつたのであります。しかしながら、多量の銀を輸

出することは、イギリスに取つて甚だ苦痛であつたので、之に代るべき商品を求め、一石で二鳥を獲んと苦心しました。そして現銀に代るべき商品を英國商人は阿片に於て發見したのであります。

第十八世紀の中頃まで、阿片は多くペルシアで栽培され、それが支那に輸入されて一部の階級に愛用され、次第に弘まつて行く情勢にあつたのであります。そこでイギリス商人はインドで阿片栽培を奬勵し、やがて印度阿片が支那に輸入され初めましたが、其の額は年々增加して行きました。それだけ支那の阿片吸飲者が激增したわけであります。此の事は支那に取つて二重の深刻なる打擊でありました。第一には阿片中毒によつて國民の心身が劣惡になります。第二には從來とは反對に現銀が國外に流出しだします。それは銅錢に對する銀の騰貴を招き、租稅收入は減少し、一般に經濟的・財政的危機を誘發する惧があつたのであります。それ故に支那は既に一七九六年に阿片の輸入を禁じ、一八一五年には國民に阿片吸飲を禁じて居りますが、此の年イギリス商人の輸入した阿片は三千箱でありま

した。一八二二年には兩廣總督阮元が嚴重に阿片販賣を禁じましたが、度々の輸入禁止に拘らず、此の年の輸入額は一萬箱に達して居ました。爾來、支那は毎年阿片禁止令を發し、その輸入及び吸飲を嚴禁せんとしましたが、輸入も吸飲も年年殖える一方で、結局どうすることも出來なかつたのは、支那の官吏が賄賂を取つて、見て見ぬふりをするからであります。そこで後には、どうせ防ぎ切れないからといふので、重稅を課して輸入を默許することにしたので、海岸到る處で密輸入が行はれ、之を取締る大官までが、いつの間にやら阿片吸飲者となつてしまつた始末でありました。

支那政府は阿片政策に就いていろいろ頭を惱まし、之に對する政治家の意見も區々でありましたが、遂に阿片貿易に徹底せる彈壓を加へるに決し、必要の場合には武力をも用ゐる覺悟を極め、この目的のために一八三九年、林則徐を欽差大臣に任じて廣東に派遣することになりました。林則徐は勇氣もあり、精力もある愛國者でありました。彼は外國商人の所有する阿片は、禁制品だから支那官憲に

引渡せと要求して、約二萬箱の阿片を押收して之を燒いてしまひましたが、偶〻此の時に支那人がイギリス水夫のために殺された事件がありました。林則徐は犯人の引渡を要求したけれど、イギリス側が之に應じなかつたので、遂に最後通牒を發し、若し時間内に犯人を引渡さなければ、廣東市外商埠地内の英人區域を攻擊すべしと威嚇したので、商埠地居留の外國人は皆なマカオに引上げました。

然るにイギリスは、欣んで林則徐の挑戰に應じたのであります。戰爭は先づ廣州附近で、支那軍艦に對するイギリス側からの砲擊を以て始められましたが、イギリスは印度を根據地とし、支那より遙に優越せる戰爭技術を用ゐ、易々と支那軍を破つたのであります。その陸海軍は、舟山列島・香港を略取し、次で寧波・上海・吳淞・鎭江等を占領しました。いまや英國艦隊は楊子江に侵入し、大運河による北支と中支との連絡を遮斷し、將に南京を衝く勢を示したので、支那は一八四二年八月二十九日、南京でイギリスとの講和條約に調印せねばならなくなつたのであります。此の南京條約は、今日まで支那を拘束する不平等條約の長き歴

史の最初のものでありますが、此の條約と翌一八四七年の補足條約とによつて、丁度百年目に昨日我軍が奪回した香港をイギリスに與へ、イギリスのために廣東・厦門・福州・寧波・上海の五港を開き、且つ此等の諸港に於ては、外國に對する是までの一切の制限を撤廢し、關稅率と港灣稅率とを定め、支那に於ける外人の治外法權の基礎を置いたのであります。

阿片戰爭はマルクスの言葉を藉りて言へば『それを誘發した密輸入者どもの貪欲に適はしき殘忍を以てイギリス人が行へるもの』であります。この戰爭は深刻無限の影響を支那に與へて居ります。まづイギリスと戰つて慘めな敗北をしたために滿洲朝廷の威信が地に落ちてしまひ、其の後決して再び回復されなかつたのであります。五つの港が貿易の自由のために開かれて以來、數千の外國船が支那に殺到し來り、支那國内には瞬く間に英米の廉價なる器械製品が氾濫するやうになり、手工を基礎とする支那產業は、機械と戰爭の前には倒れ去る外仕方がなかつたのであります。いまや驚くべき多量の不生產的なる阿片が消費され、阿片貿

易によつて貴金屬が流出したのに加へて、國內生產に及ぼせる外國競爭の破壞的影響が加はつて來たのであります。舊い支那が維持され、保存されるための第一要件は、完全に國を鎖ざして置くことでありましたが、今や其の鎖國が、イギリスの武力によつて苦もなく打破られたのであります。恰も密封された柩の中に、注意深く納められて來たミイラが、一朝新鮮なる外氣に觸れると、立ち所にボロボロとなるやうに、阿片戰爭は支那の財政・產業・道德並に政治機構の上に重大なる作用を及ぼし、必然的に支那國家の解體を促したのであります。此の時以來急速に土地は腐敗した官吏や豪商の手に落ちて往つた。灌漑や堤防が投げやりにされたので、旱魃や洪水の度每に農民は貧困に陷つた。匪賊の橫行跋扈が年と共に甚だしくなつた。騷動は各地に勃發した。その最も大規模なるものは、いふまでもなく一八五〇年から六四年に亙る長髮賊の亂であります。そして歐米列强、わけてもイギリスは、此の動亂を好機として、一層强大なる根據を支那に於て築き上げたのであります。

やがてアロー號事件を導火として、第二次英支戰爭が行はれました。アロー號といふのは香港政廳に登錄されて居た支那船で、アイルランド人を船長とし、勝手に英國國旗を揭げて航海して居りましたが、水夫十四名は皆な支那人で、實は英國國旗の蔭に隱れて阿片の密輸入を事として居た數々の船の一であつたのであります。一八五六年、此の船が廣東下流の黃埔に碇泊して居た時に、船長の留守中に支那兵が乘込み、禁制品の阿片を發見したので、英國國旗を引下ろし、乘組員十二名を罪人として支那軍艦に引致しました。此の些々たることを口實とし、また先年フランス宣敎師が廣西の田舍で殺されたので、支那に難題を吹かけて居たフランスと聯合し、一八五七年暮、英佛聯合軍が廣東を攻めて之を陷れ、總督葉明琛を囚へて之をカルカッタに送りましたが、一年の後に之を幽死させて居ります。そこで英國司令官は一書を北京に送り、支那全權は香港に來て和を講ぜよと申入れたが、支那は無論之に應じなかつたので、然らば直接北京政府と談判すると稱へて、戰を北方に移し、英佛聯合軍は白河河口の太沽砲臺を陷れ、河を溯

つて天津に入つたので、支那は止むなく兩國と和議を結んだのが所謂天津條約であります。この條約によつてイギリス其の他の列强は、北京に公使を駐在させること、既に開かれた五港以外に更に五港を開くこと、イギリス船舶のために楊子江を開放することなどを取極めました。

此の條約は北京で批准交換せらるべきものであつたが、支那側は上海で之を行はうとしたので、イギリスは例によつて武力を以て强行しようとし、一八五九年英國艦隊は天津に進航するに決しましたが、此の度は太沽砲臺から砲擊を受けて一旦退却した後、更に英佛相結んで再び支那に宣戰し、海陸合して二萬五千より成る英佛聯合軍が、またもや支那を破つて、此の度は北京に進擊し、清國皇帝は熱河に蒙塵するに至りました。此の戰爭に於てイギリス陸軍の主力は、實に一萬の印度兵でありました。印度人は英人のために其の國を奪はれた上、同じ亞細亞の國々を征服する手先に使はれて今日に及んで居ります。かくて支那は、一八六〇年十月、英佛兩國と北京條約を結び、天津條約を確認し、天津を開港場とし、

多額の償金を拂ひました。香港の對岸九龍を奪ひ取つたのも此の條約によつてであります。一八五九年、此の戰爭が尙ほ酣であつた時、イギリスの新聞、デーリ・テレグラフは實に次のやうな社說を掲げて居ります——

『大英帝國は支那の全海岸を襲擊し、首府を占領し、清帝を其の宮廷より放逐し、將來起り得る攻擊に對して實質的保障を得ねばならぬ。わが國家的象徵に侮辱を加へんとする支那官吏を鞭にて打て。總ての支那將校を海賊や人殺しと同じく、英國軍艦の帆桁にかけよ。人殺しの如き人相して、奇怪な服裝をなせる是等多數の惡黨の姿は、笑ふに堪へざるものである。支那に向つては、イギリスが彼等より優秀であり、彼等の支配者たるべきものたることを知らせねばならぬ。』誠に驚くべき征服欲であり、また驚くべき下品な言葉使でもあります。

次でイギリスは、更に陸路によつて支那への進出を試みました。既にビルマを征服せるイギリスは、一八七六年ビルマと支那とを遮る嶮峻なる山脈を突破して、雲南省との通商路を開かんとし、ブラウン大佐を隊長として、ビルマのバモから

雲南省昆明に至るべき遠征隊を派遣することにしました。同時に英國領事館附書記生マーガリが、上海から漢口に出で、湖南・雲南を經てバモに出で、此處で準備を整へ待つて居たブラウン大佐に會し、その通譯兼案内者となつて雲南に向つて引返しましたが、途上ブラウン大佐に別れて出發し、雲南の一驛で何者かのために殺され、またブラウン大佐も支那兵のために圍まれ、目的を遂げずにビルマに引返しました。此の路が、今度の支那事變に至つて開通した所謂ビルマ・ルートであります。イギリスは、此のマーガリ事件を口實として支那を威嚇し、此の年所謂芝罘條約を結びましたが、イギリスは此の條約によつて、支那又は印度から自由に西藏に入國し得るやうになり、爾來、着々西藏に勢力を扶植し、そのために幾度か支那と衝突しましたが、その都度支那は讓歩するだけでありました。そしてイギリスは西藏を勢力範圍とすることによつて、一面ロシアの印度侵略に備へ、他面之を足場として雲南・四川への進出を執拗に續けたのであります。

若し新興日本が支那保全を以て其の不動の國是とし、且つ此の國是を實行する

力を具へて居なかつたならば、既に阿弗利加大陸の分割を終へ、滿輻の帝國主義的野心を抱いて東亞に殺到し來れる歐米列强は、必ず支那分割を遂行し、イギリスは當然獅子の分前を得たことと存じます。現に支那・印度・西藏に活躍せる名高きイギリス軍人ヤングハズバンドは、支那の如く土地は廣大、物產は豐富、而も其の全地域が人間の住むに適する溫帶圈内に横はる國土を、一個の民族が獨占して居るのは、神の御心に背く——Against God's Will だと公言して居るのであります。日本の强大なる武力は、幸にして支那を列强の俎の上にのせなかつたのでありますが、それでもイギリスの政治的・經濟的進出を拒むに由なく、支那の最も大切なる動脈楊子江に於て、わけてもイギリスの勢力は嶄然他を凌いで强大となつたのであります。從つて日本が長江に經濟的進出を始めるに及んで、其の最も手强き妨害者はイギリスであつたのです。其の數々を列擧することは時間が許しませんが、唯一つイギリスの惡辣なる妨害とは如何なるものであつたかを示す實例を擧げます。それは日英同盟が結ばれた翌年卽ち一九〇二年に、日本郵船

會社が、曾て三十年間楊子江に航路を張つて居た英人マクベーンの事業を數百萬圓で買收し、其の船に社旗を揭げて楊子江航路を開始すると、稀代の珍事が起つたのであります。卽ち上海・漢口を初め楊子江岸諸港の英國人居留地會が、郵船會社の船には一切今までマクベーン船舶の繫留せる水面に立寄るを許さずといふ決議をしたことであります。これは地所は賣つたが空中權は賣らないから、家を建ててはならぬといふに等しい無理難題であります。日本は極力抗議したけれど、英人は頑として聽き入れず、郵船會社は百計盡きてフランス人に交渉し、不便ではあつたがフランス居留地の水面に繫船し、遠く倉庫から迂回して荷物を揚卸することになつたのであります。之が後の日淸汽船會社の前身であります。日本はイギリス人の同樣の意地惡き妨害と幾度か戰ひながら、とにもかくにも長江流域に今日までの地位を築き上げたのであります。日本の長江發展史は、取りも直さずイギリスとの經濟鬪爭史であります。

第六日

中央亞細亞のパミール高原は、古より世界の屋根と呼ばれて居ります。此の高原から斜めに西南に走る山脈はスライマン山脈と呼ばれ、印度とアフガニスタンの國境を走つて印度洋に盡きて居ります。また此の高原から北に走るものは天山山脈と呼ばれ、ズンガリア盆地に於て一旦杜絕した後、再びアルタイ山脈となつて東北に延び、更にヤブロノイ山脈・スタノボイ山脈となつて一層東北に向ひ、遂に亞細亞大陸の東北端イースト・ケープとなつてベーリング海峽に突出して居ります。卽ち南はインダス河口から北はベーリング海峽に至るまで、亞細亞大陸は西南より東北に走る蜿蜒萬里の山脈によつて、まさしく兩斷されて居るのであります。この山脈は世界の屋根の長い長い棟であります。而してこの屋根によつて舊世界は東洋と西洋との二つに分たれて居ります。卽ちこの屋根の棟の東南斜

面が東洋であり西南斜面が取りも直さず西洋であります。ペルシア・小亞細亞・アラビアの諸國は、亞細亞のうちに含まれては居りますが、之を地理學の上から見ても、また世界歴史の上から見ても、明かに西洋に屬するものであり、眞實の意味の東洋は疑ひもなくバミール高原以東の地であります。

此の東洋の世界はヒマラヤ山脈に起り、崑崙山脈となり、東へ東へと進んで支那海に至つて盡きる東西萬里の山脈によつて、更に南北に兩分されて居ります。南方卽ちヒマラヤ山脈の南斜面は印度であり、ヒマラヤの北、天山アルタイ兩山脈の東が取りも直さず支那であります。而して印度と總稱されるヒマラヤ山脈の南斜面は、更に東西兩部に分たれ、西なるはヒンドスタン・インド人の國、卽ち狹い意味の印度であり、東部はビルマ・タイ・安南等を含む謂はゆる印度支那で、其の名の如く地理的にも歴史的にも、東洋の偉大なる二つの部分、印度及び支那の中間に位する國土であります。

印度と支那とは、東洋の二つの偉大なる中心であります。兩者の面積は殆んど

相同じく、人口はまた各ゝ數億を數へ、ヒマラヤ山脈によつて南北相隔てられ、一方には蒙古人種、他方にはアリヤン人種が住み、一方は溫帶、他方は熱帶、相距ることも遠く、相異なること大でありますが、東洋は實に此の二つのものの結合によつて一つの全體をなして居るのであります。而して我が日本は此等の東洋の二つの中心から、實に幾多の貴きものを學び、善きものを習ひ、之を自身の精神の裡に統一し、之を生活の上に實現しつつ今日に及んだのであります。西洋人が渡來するまで、日本人に取つて世界とは實に支那と印度、卽ち唐と天竺とを中心とする東洋を意味し、此の兩國に我が日本を加へて三國と稱へて來たのであります。三國一の花嫁とは世界第一の花嫁のこと、三國一の富士山とは支那にも印度にもない世界一の立派な山のことであつたのであります。三國妖婦傳といふ物語では、九尾の狐が、支那・印度・日本三國の宮廷を瞞しまはつて居ります。それ故に支那と印度とは、我々にとりては、少くとも我々の祖先にとりては、決して他國ではなかつたのであります。日本は此等の國から數々のものを學んだので、

啻に他國でないのみならず、實に大切な國、有難い國であつたのであります。然るに今や釋尊が生れ、孔孟が生れた其の大切な國が、イギリスの屬國となり、その半植民地と成り果てて居るのであります。

我々が印度から學んだ最も貴いものは宗教であります。卽ち印度思想・印度文明の精華と申すべき佛教の信仰であります。我々の祖先が如何に誠實に此の教を學び、此の教の生れた印度に憧憬して居たかを示すため、幾多の例を擧げることが出來ますが、最も私の心を打つた一つだけを申上げます。それは鎌倉初期の高德、京都栂尾の明惠上人のことであります。此の上人は印度に渡つて佛蹟を巡禮したいといふ抑へ難い願ひから、其の巡禮の筋道を事細かに調べ上げ、支那の都の長安から印度の王舍城までは八千三百三十里、日に八里づつ歩けば千日、日に五里づつ歩けば、正月元日に長安を出發して五年目の六月十日の午刻に王舍城に辿り着く、天竺は佛の生國なり、戀慕の思抑へ難きにより、遊意をなして之を計る、あはれあはれ參らばやと書いて居ります。不幸病のために印度巡禮の願は遂

げられなかつたが、印度から渡つて來た竹を見るに、日本の竹と異なる所がない。さすれば釋尊當時の竹林園の竹もまたかやうな竹であらうと、一むらの竹を學問所の前に植ゑつけ、之を竹林竹と名けて、あけくれ眺めて居たのであります。まことに激しい思慕のこころと申さねばなりませぬ。若し此の明惠上人が、今日蘇つて印度の現狀を見、印度がイギリスの鐵鎖に縛られ、其の民は牛馬の如く虐げられて居るのを見たならば、血涙を流して悲しみ、火の如く激しく憤ることであらうと存じます。

我々は印度の佛教から、信仰だけを學んだのではありません。佛教は同時に五明卽ち五つの學問を我々に教へて居ります。第一は因明で、論理の講究、第二は內明で、教典の研究、第三は聲明で、言語音律の研究、第四は醫方明で、醫術の研究、第五は工巧明で、工藝美術の研究であります。而も教典の研究のうちには、佛典以外の儒教の經典をも含み、寺は寺小屋と呼ばれて國民教育の機關となり、その教科書には儒教の經典が用ゐられて居たのでありますから、佛教は日本に取

りて一個の宗教であつたのみならず、同時に文化の綜合體であつたのであります。即ち印度文化全體が釋尊又は佛教を通じて我國に傳へられ、その佛教の眞理は、いろいろなる理論によつてに非ず、生活體驗によつて日本人の魂に浸み込んだのであります。從つて佛教徒たると否とを問はず、我々日本人は甚だ多くを釋尊の印度に負うて居るのであります。それ故、眞實の日本人である限り、多かれ少かれ明惠[illegible]人が抱くであらう所の悲しみと憤りとを感ぜねばならぬ筈であります。それでありますから、我々日本人が英國の印度統治に對して加へる彈劾は、一昨日紹介したアメリカのブライヤンが加へる如き、單なる人道主義に據る道德的非難たるに止まらず、同時に我心と我身とに加へられたる辱しめを感じての義憤であります。現代印度革命思想の生みの親アラビンダ・ゴーシュは『壓制者あり、我母の胸に坐す。我母を此の壓制者より救ふまで、我は斷じて息まず』と誓つて居りますが、我々は此の悲壯なる覺悟を、我々自身の覺悟の如く身に沁みて感ずるものであります。私は此の度の對米英戰爭に於ける日本の勝利が、必ず印度獨

立の機緣となり、導火線となつて、古へ釋尊より受けたる敎に對する最も善き贈物として、自由を印度に與へ得るに至らんことを切望するものであります。

日本と印度との間のかくの如き關係は、支那との場合に於ても同然であります。我々は支那文明の精華と申すべき孔孟の敎を支那から學んだのであります。我々は、總ての生活の基礎を倫理に置かねばならぬこと、卽ち人格の上に置かねばならぬといふ高貴なる精神を、極めて明晰なる理論を以て儒敎から學んだのであります。のみならず、江戸時代三百年の間、學問と申せば支那の學問でありましたので、政治・道德・文學、あらゆる方面に於て善かれ惡かれ支那文化は國民生活の隅々に浸透し、印度が然る如く支那もまた我身我心の一部となつたのであります。其の上支那は印度と異なり、一衣帶水の間柄でありますから、多くの支那人が日本に來て、彼等の血が日本人の血に混つて居ります。中國の大大名であつた大內氏も、薩摩の島津家も、遠く其の祖先をたづねば、朝鮮を經て日本に渡つて來た支那人だと言はれ、一徹短氣で名高い赤穗義士の武林唯七は孟子の子孫だと

も申されて居ります。純然たる日本文學と考へられて居る紫式部の源氏物語でさへ、其の思想も、その文學としての結構も、明かに漢學漢文から脱化したものであります。大寶令は御承知の如く支那の法律制度を模範としたものであります。我等の先祖は日本の歴史を學ぶと同じ程度の親しみを以て支那の歴史を學び、日本の英雄豪傑を崇拜すると同じ程度の熱心を以て支那の英雄豪傑を崇拜したのであります。諸葛孔明の出師表は、どれほど日本人に忠義の心を鼓吹したか知れず、岳飛の誠忠がどれほど士氣を鼓舞したか測り知れぬほどであります。日本人中の最も偉大なる日本人西郷隆盛が、如何に伯夷叔齊の高潔なる心事に傾倒して居たかは、彼自身の文章によつて知ることが出來ます。わけても支那文學が甚だしく日本人に喜ばれ、漢詩を作ることは、教養ある人士に缺くべからざる條件の一つとさへなつたので、支那の詩歌文學に現れて來る山や川は自分の故郷の地名の如く日本人の耳に響いたのであります。黄河も楊子江も、赤壁も寒山寺も、乃至西湖も洞庭湖も、皆な我々の耳に久しく聞き馴れて居りますので、例へば『楊子江

頭楊柳の春、楊花は愁殺す江を渡るの人』といふ詩を吟ずれば、我々は支那の詩人が、長江に寄せた綿々の哀愁を、自ら楊子江畔に立つて感ずる如く感じます。また『洞庭西に望めば楚江分る、水盡きて南天雲を見ず』と歌へば、洞庭湖は決して他國の湖とは思へないのであります。かやうな次第で日本と支那との間には、心の境がなくなつて居たのであります。日本人と支那人とは、『我々』といふ一人稱を用ふべき兄弟であります。此の支那が、國民の身と心を蝕ばみ盡す阿片吸飲のあさましい風習を止めるために、阿片輸入を禁止するのは當然至極のことでありましたが、それが承知罷りならぬといつて武力を用ゐたのが實にイギリスであります。イギリスは、一切の道德を無視し、毒藥を賣込んで金儲をしようといふ一群の商人の貪欲なる希望を滿足させるために、その軍隊を用ゐたのでありますから、英國軍隊を貫く精神は、ホーキンス、ドレーク等の昔ながらの海賊精神であります。今も昔も變りなき此の海賊精神を以て、イギリスは支那に臨み、必要あれば武力を以て、然らざる時は買收と外交的術策と威嚇とを以て、遂に支那

を其の半植民地とし、支那民族を最も都合よき搾取の對象としたのであります。イギリスの對支政策は形こそ變れ、大砲の筒先を向けて、恐るべき阿片を突きつけ、飲まねば打つぞと言つた其の精神の種々の現れであります。

日本が支那の領土保全を不動の國是として來たのは、其の奥深き根柢を、日本人の眞心に有して居ります。支那の文明は黄河と楊子江の流域に起り、その文明は我が日本の生命と生活とのうちに、今尚ほ潑剌として生きて居るのであります。それ故に何はともあれ、黄河、楊子江の流域が他國の手に奪はれるに忍びない、飽くまでも之を漢民族の手に保存させて置きたいといふのが、自づと湧き上がる日本民族の赤誠であります。支那は、此の赤誠より迸れる日本の政策のために、イギリスの、又はロシアの奴隷となり果てずに濟んだとは申せ、年久しく歐米の資本主義並に帝國主義角逐の舞臺となつて來たので、年一年と自國の貴重なる文化を犧牲にする危險に曝されて參つたのであります。曾ては東亞の國々をあれほど豐かにした支那文化は、巧みに支那の統一を破る術を心得て居る歐羅巴帝國主

義的諸國、就中イギリスの侵入と共に、內的にも外的にも弱められて、つひに偉大なる過去の、單なる影と成り下らんとして居ります。のみならず、イギリスの巧妙なる搾取と相並んで、今やボルシェヰズムの暗い力が新たに支那の舞臺に現れ、衰へたる支那を其の勢力の下に置き初めたので、支那の文化は破壞崩潰に對して、益々無抵抗に曝されるに至つたのであります。日本は自國の文化と、支那に於て脅されつつある東洋文化を救ふために、あらゆる努力を續けて戰ひ來れるに拘らず、支那は起つて我等と共に東洋を護り、亞細亞を滅ぼす勢力と戰はんとはせず、却つて刄を我等に向け來つたのであります。而して、東洋の敵たる英米と手を握り、今尚ほ東洋を救ひつつある日本と戰ひ續けんとするのであります。もとより南京政府は既に樹立せられ、汪精衞氏以下の諸君は、興亞の戰に於て我等と異體同心になつて居りますが、支那國民の多數は其の心の底に於て尚ほ蔣政權を指導者と仰ぎ、日本の眞意を覺らんともせず、却つて日本に反抗しつつあることは、悲痛無限に存じます。さりながら明治維新を顧みましても、各藩に勤皇

佐幕の對立抗爭あり、勤皇諸藩の間に反目嫉視あり、最後に薩長相結んで幕府を倒すに至るまで、如何に多くの高貴なる鮮血が流されたかを思へば、是れ亦止むなき次第であります。

日本の掲げる東亞新秩序とは、決して單なるスローガンではありませぬ。それは東亞の總ての民族に取りて、此の上なく眞劍なる生活の問題と、切實なる課題とを表現せるものであります。此の問題又は課題は、實に東洋最高の文化財に關するものであります。それ故に我等の大東亞戰は、單に資源獲得のための戰でなく、經濟的利益のための戰でなく、實に東洋の最高なる精神的價値及び文化的價値のための戰であります。

此の東洋文化財は、既に申上げた通り、わが日本民族の魂に、またわが日本國家の中に統一されて、其の最高の價値と意義とを發揮して居るのであります。我我日本人の魂は、直ちに是れ三國魂であります。日本精神とは、やまとごころによつて支那精神と印度精神とを綜合せる東洋魂であります。從つて東亞新秩序の

眞箇の基礎たるべき魂は、既に儼然として存在し且つ活躍しつつあるのであります。足かけ五年、我々は此の魂を基礎とせる秩序を、先づ支那に於て實現するために、此の實現を妨げるものと善戰健鬪して來ました。然るに今や世界史の進轉は、東洋の敵たる英米と日本との明らさまなる戰爭となり、從つて此の新秩序の範圍を、印度にまで擴大し得る形勢となつたことは、我々の欣喜に堪へざる所であります。大東亞卽ち日本・支那・印度の三國は、既に日本の心に於て一體となつて居ります。我等の心裡に潛む此の三國を、具體化し客觀化して一個の秩序たらしめるための戰が、卽ち大東亞戰であります。支那民族はやがて其の非を覺るであらう。印度民族はやがて解放されるであらう。正しき支那と蘇れる印度とが、日本と相結んで東洋の新秩序を實現するまで、如何に大なる困難があらうとも、我等は戰ひぬかねばなりませぬ。いと貴きものは、いと高き價を拂はずば決して得られないのであります。想へば一九四一といふ數は、日本に取りて因緣不可思議の數であります。元寇の難は皇紀一九四一年であり、英米の挑戰は西紀一九四

一年であります。私は日本の覺悟と努力とによつて、英米の運命また蒙古のそれの如くなるべきことを信じて、此の不束なる講演を終ることと致します。

米英東亞侵略史

昭和十七年一月二十三日印刷
昭和十七年一月二十八日第一刷二萬部發行

㊙定價一圓二十錢

著者 大川周明
東京市麹町區三番町一
刊行者 長谷川巳之吉
東京市麹町區三番町一
刊行所 第一書房
振替東京六四二二三
電話九段一四一五 三三四四

東京市銀座數寄屋橋
發兌 第一書房
電話京橋五九八七
東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

外地定價一圓三十二錢
但、土地の事情に依り
尙割增することあるべし。

會員登錄番號
一一六五〇八

＊落丁・亂丁の際は直接本社にてお取替へ致します。

印刷者 東京市牛込區山吹町一九八 荻原芳雄

法學博士　大川周明著

亞細亞建設者

四六判四二八頁
定價一圓八十錢

此等の英雄は、國運既に窮まり、國民總て希望を失ひ、或は號哭し或は自棄する以外、また爲すところを知らざりし時、屹然立つて民族の命脈を一身に負擔し、芽出度き春を其の國々に問らしめた。予は今更の如く、一人能く國を興し、一人能く國を亡すと言へる古人の言葉を、身に沁みて感ぜざるを得ない。

予は特に五人の英雄を擇び、その慘澹たる善戰健鬪の生涯を敍べることによつて、彼等の生れし國々の試煉と刻苦と更生の姿を、一層如實に示さんと志した。世を擧げて盧山の雲霧に彷徨しつつありし時、獨り卓然として機運の趨くところを徹見し、自ら陣頭に立つて亞細亞を正しき動向に導けるものは、實に彼等の莊嚴なる魂に外ならぬ故である。

（著者の序より）

法學博士　大川周明著

新訂　日本二千六百年史

第一書房・戰時體制版　價七十八錢

近日增刷出來

終